Marina D'Amato

ÉRASE UNA VEZ EN

EUROPA

ヨーロッパのおとぎ話

編著——マリーナ・ダマート

本文翻訳——村岡直子、小机菜穂、平野麻紗

本文翻訳統括——宇野和美　序文&あとがき翻訳——上野真弓

挿絵——ヒグチユウコ、浦上和久、牧野千穂、門田千明、
網中いづる、寺澤智恵子、祖敷大輔

駐日欧州連合代表部

Érase una vez en EUROPA

Second edition, 2025
First edition on Electronic PDF, 2023

Text © by Marina D'Amato
Translation © Mayumi Ueno (P5-14, P153-159)
Naoko Muraoka (P15-64), Naho Kozukue (P65-111), Asa Hirano(p112-152)
Supervised by Kazumi Uno, for each story in Spanish

Illustration © Yuko Higuchi (P19, 98, 127), Kazuhisa Uragami (P23, 67, 119, 146),
Chiho Makino (P32, 94, 115, 141), Chiaki Kadota (P38, 52, 63, 131),
Izuru Aminaka (P43, 73, 81, 151), Chieko Terasawa (P48, 77, 104, 123),
Daisuke Soshiki (P58, 88, 110, 137)
Designed and typesetting by Daigo Nagamatsu
Proof Reading by Miho Watanabe

Edited by Yuko Tanaka (MINISAN, Ltd., Office Yuko TANAKA)

Produced by Thomas Gilbert, Mai Asami (Delegation of the European Union to Japan)

D.R. © European Union, 2025
Europa House,
4-6-28 Minami-Azabu, Minato-ku,
106-0047 Tokyo

Free distribution, Not for sale

No part of this publication may be reproduced, stored in a retrieval system, or transmitted in any form or by any means, electronic, mechanical, photocopying, recording, or otherwise, without the prior written permission of the copyright holder. This includes, but is not limited to, scanning, photocopying, faxing, emailing, posting, or distributing printed or digital copies of this work. All rights reserved.

もくじ

ヨーロッパのおとぎ話 5

ヘンゼルとグレーテル 15

巨人（きょじん）と仕立て屋 21

ティル・オイレンシュピーゲル 30

かくされた宝（たから） 35

ヘビのおきさき 40

金色の魚 45

人魚ひめ 50

ラバの頭の裁判官（さいばんかん） 56

ケケツ 61

おそれ知らずのフアン 65

カレヴィポエグ 71

野生の白鳥 75

シンデレラ 79

86 うさぎとかめ
91 おひめさまと羊飼い
96 レプラコーン
101 ピノッキオ
107 クマより強い英雄
112 ヘビのおきさきエグレ
117 幸運なむすこのはなし
121 ゴゾ島の巨人
125 マッチ売りの少女
129 銀のくつ
134 バルセロスの雄鶏
139 大工と悪魔
144 ハラプ・アルブ
148 氷のおひめさま
153 おわりに

ヨーロッパのおとぎ話

マリーナ・ダマート
訳――上野真弓 (Mayumi Ueno)

はじめに

親愛なる少年少女たち、この本はみなさんに捧げたものです。あなたが手にしているのは、中世以来、私たちと共にある物語の中から選んで集めたおとぎ話集です。

どの物語も世代から世代へと受け継がれ、各地域の子どもたちを楽しませながら世界の価値観や行動規範を伝えてきたものです。このように文学を通して、子どもたちは自分たちを取り囲む世界に対する認識を広げていくのです。

私は、欧州連合を構成する二七の国々で語り継がれるたくさんのお話の中から最も特徴的なものを選びました。それぞれの物語は海や山を舞台にしたものもあれば平坦な土地での話もあり、さらに宗教や言語、歴史や文学、芸術にも大きな違いがあります。

国や地域で大きな違いがあってもなお、私が物語を集めてわかったこと、それはヨーロッパのどこへ行っても、自由や独立、連帯、他者や環境を尊重する多様性の価値観は同じだということです。世界中の人々を一つにする普遍的な価値観を軸とする物語を集めたのが、このおとぎ話集なのです。

はたして欧州各国の建国の父たちは、自分の土地で生まれた物語を聞いて教わった価値観で、平和な世界をつくったのでしょうか？　さぁ、これから見つけていきましょう！

エウローペーの物語

むかしむかし、私たちの歴史が始まる何千年も前のことです、若くてとても美しいフェニキアの王女さまがいました。名前はエウローペーで、テュルスの王さまの娘でした。ある日、海辺で友だちと遊んでいる彼女を見て、天空や雷、風や雲、宇宙や法と秩序をつかさどる神で、オリンポスのすべての神々の父でもあるゼウスが、エウローペーにすっかり恋をしてしまいました。

ゼウスはただちに彼女を手に入れようと決心しましたが、神の本当の姿を見せると、彼女が怖がってしまうと考えました。そこでゼウスは、穏やかな様子をした金色のツノを持つ美しい白い牡牛の姿に変身したのです。

エウローペーはこの珍しい動物を見てびっくりしました。何よりも牡牛の美しさに魅せられて、すぐに近づいて背中をなで始めました。牡牛は優しく魅力的な仕草で自分の上に乗るよう少女にうながし、簡単に登れるよう膝を折りました。

エウローペーが牡牛の背中に乗ると、ゼウス（牡牛）は急ぎ彼女を連れ去り、海を渡ってクレタ島へ行きました。最初はおびえて自分の国や父王や友だちから離れたくないと大声で叫んでいたエウローペーでしたが、しばらくすると何の危険もないとわかり、怖さも消えてくつろいだ気分になりました。

そこでゼウスは自分の正体を明かし彼女を愛していると伝え、幸せにしたくてさらったのだと説明しました。しばらくすると彼女も彼を深く愛するようになり、二人はとても幸せに暮らして、三人の子どもが生まれました。

エウローペーが死んだ時、ゼウスは彼女との思い出を忘れないように空へ置くことを決め、「牡牛座」の星座をつくりました。星は今でも夜空で輝いています。

エウローペーの神話は愛と冒険の物語とされますが、ほかに象徴的な見方――東洋と西洋の関係

を表したもの、あるいはアジアからヨーロッパへ文明が伝わり広がっていく過程――として考える人もいます。いずれにしても、エウローペーとゼウスの物語は、ギリシア神話の中で最も有名で愛されている物語の一つです（ちなみにエウローペーはヨーロッパの語源となりました）。

はてしない道の短い歴史

四〇万年前、直立歩行をするようになった人間は火を使うことを学びました。そして、共同生活をするようになりました。岩の洞窟には、先史時代の私たちの祖先が生活する様子を記した跡があり、人間は夜になると火の周りに集まっていたことを伝えてくれます。洞窟の岩壁に描かれた絵を見ると、ホモ・サピエンスには想像する能力があったこともわかりました。ラスコーの洞窟には、架空の動物や実際にはありえない物語を描いたものがあります。おそらく、私たちの想像力の起源は人類が誕生した先史時代にあるのでしょう。それ以来、物語は広まっていったのです。人類学者や考古学者はあらゆる文明において世界が進化していく様子を検証しました。火の周りでは、大人も子どもも、農民も狩人も、男も女も、みな楽しそうにしていました。恐れを乗り越えるため、経験を分かち合うため、自分が得た知識を誰かに伝えるため、そしてまた、生きることを教えるために必要な物語をつくり語っていたのです。経験、実践、活動、そして知識は、口から口へと伝わり始めました。こうして長い間に地球上のすべての民族に伝わったのです。自分たちの暮らす地域独特の物語で過去の経験を知ることは、それが現実のものでも想像のものでも、現代の子どもたちにとって将来に役立つ考え方や生き方の基本となります。そして、旅行者や移民が移動するたびにまた物語を伝え、新しい世界に適応した新たな物語が生まれるのです。

多くの文化に共通する物語があることからわかるように、かつて多くの国どうしで交流があった可能性が考えられます。たとえばグリム兄弟が『カエルの王さま』で語ったのは、ヒキガエルが誰かに愛された時に王子さまに変身するというものですが、この話はオーストラリアの先住民アボリジニや、

南米大陸最南端部ティエラ・デル・フエゴでも、北のエスキモーの人たちにも、よく知られています。『青ひげ』という物語でも同じことが言えます。この話は一六九七年にシャルル・ペローが書いて有名になりましたが、実はそれより何百年も前から伝わっていた物語でした。ただ表現が違っていただけです。インドでは仮面をかぶったトラ、ロシアではクマ、そしてフランスではイメージしやすいひげのある騎士になったのです。

つまり、物語は地球上の人間の歴史の中にもともとあったものだということです。この本で紹介するお話の多くは作者がはっきりしない物語です。ある時代にどこかの誰かが、少しずつ内容が変化した物語を聞いて文字に残し伝えたものを、近代の作家がおとぎ話として書いたものです。

物語の中の物語

ヨーロッパで最も古い物語集は、一三九二年にジェフリー・チョーサーが編纂した『カンタベリー物語』で、カンタベリーへ向かう巡礼者のグループが旅の途中で話した二四の物語を集めたものです。ただし古代の物語を集めた最大の物語集は、一六三四年にジャンバッティスタ・バジーレの書いた『物語の中の物語』（ペンタメローネ 五日物語）です。

この長大な本には私たちが知っている伝統的な物語のほとんどが含まれています。なんと紀元八五〇年ごろに中国で生まれた『シンデレラ』の話まで登場するのです。『葉限』というタイトルで有名ですが、継母と異母姉妹からひどい仕打ちを受けている少女がパーティから帰る際に金の靴をなくすという、昔から語り伝えられてきた物語を文字で書き起こしたものです。

考古学者が三千年前のパピルスの紙葉に四人のエジプトの書記官が書いた二人の兄弟の物語を発見しました。二人の兄弟の物語は、時を経て、海や山を越えて、ナポリの『物語の中の物語』のページの中に収められました。そして、一六九七年にシャルル・ペローも、フランスやその他の地域で何世紀にもわたって伝統的に口承で語り継がれてきた古い物語を集めて本にする時、二人の兄弟の物

語を入れました。ドイツではグリム兄弟が一八一二年に同じようなことをしました。

ジャン・ド・ラ・フォンテーヌは、一六六八年のフランスで別の道を歩みました。この作家は、イソップやパエドルスの道徳的、政治的な教訓を語る物語に影響を受けて、風刺と批判精神が将来のフランス国王の倫理的形成に必要なものだと考えました。太陽王ルイ一四世は、後継者に倫理的な考えを養ってもらうため、ラ・フォンテーヌに協力しました。そして、ヘレニズムとローマ文明の素晴らしい伝統と倫理を再現した寓話が書かれたのでした。

何千年ものあいだ語り続けられるお話が持つ魅力は、物語の普遍性に関わる要素だけでなく、時間を超える大きな力、そして、ものの見方や世界の捉え方を学ぶためには不可欠な要素だということです。

それでは、伝統的な物語とはいったい何なのでしょう？　それは普遍的な価値観を持ち、時代の習慣や生き残るための手段を反映する、世代から世代へと口承で伝えられた集団的記憶の成果にほかなりません。この本ではできるだけわかりやすくみなさんに伝わるよう、それぞれの物語は短く語られています。登場人物はたいてい何かを象徴するシンボルで、おもしろおかしく、からかうようなことも表現されています。物語それじたいが何かを判断したり、はっきりと教えたりはしません。他の物語とも関係があるわけではなく、それぞれ独立した物語なのです。

いっぽう、寓話には明らかに道徳と人生の教えがあります。おとぎ話に明確な教訓を表現したのはシャルル・ペローでした。彼の目的がまさに子どもたちを教育することだったからです。そして一六九七年には『寓意のある昔話』という寓話集で児童文学の道を開きました。しかし、寓話は空想の物語だけに限定されず、体系化するのが難しいことが多く、これについては専門家のあいだで意見の相違や議論を呼びました。

寓話は、たいていの場合、空想の世界で起こる話が基本となっていますが、話の中にはあまり魔法の要素がありません。そのため、キリスト教、イスラム教、ヒンズー教、神道など、一般的な道徳の

要素を中心とした宗教的な寓話が多くなっています。その中でヒーローが鬼や巨人、悪魔などの悪を打ち負かす話もありますが、笑えるような話、ありえないような話も尽きません。たいていは、おかしな主人公や世界の創造やものごとのなりゆきを説明する人が登場する話、あるいはただ単に楽しむだけの話もあります。

ボッカッチョの『デカメロン』にさかのぼる小説は、作者自身が明言したように、幸せな話と残酷な話、日常生活での出来事や恋愛が多く詰まった話をまとめたものです。物語とは異なり、小説は、リアリズムと斬新さという二つの基準が生まれた時代の現代性に特徴があります。このジャンルは一四六〇年ごろフランスで大きなブームを起こし、ブルゴーニュ公国時代に起こった実際の出来事や古い話を書き直した小説集が出版されました。作者は不明ですが、あらゆる想像力を広げるような素晴らしい語り口で表現されています。その後、一五五九年にはフランソワ一世の姉であるナヴァルのマルグリットが書いた『エプタメロン』が出版され、これによってフランスでは独立したジャンルとしての小説が確立されました。

一七〇〇年代初頭には、暴力や残酷さを表に出した悲劇的な小説が登場します。おそらく一七世紀の短編小説を代表するセルバンテスの小説の影響からでしょう。物語の構想は、歴史小説や勇者が登場する短編小説という傾向が続きます。この時代のよい作品は古典的な物語のモデルに従っています。

ヨーロッパにおける寓話の黄金時代はまちがいなく一八世紀です。この時代にはシャルル・ペローの空想的な要素だけでなく、オリエントの物語へのロマンチックな憧れがありました。これは、一七〇四年以降アントワーヌ・ガランが広めたもので、アラビアの『千夜一夜物語』から始まり、フランソワ・ペティ・ド・ラ・クロアのペルシアの物語と『千一日物語』に続きます。

こうした物語は圧倒的成功を収めて、急速に広まりました。トマ・シモン・グレットは『千と一時間の四分の一物語（タタール人の物語）』を出版するほどでした。

そして、もう一つの偉大な時代が訪れます。評論家が繰り広げた道徳的戦いに勝利した自由奔放な物語と啓蒙主義の哲学の登場です。ヴォルテールとマルモンテルは、遊び心と教訓的な内容に政治的な要素をからめた方法で物語を書き、こうして一八世紀末には物語はロマンチックな趣味から離れ始め、信憑性のあるリアリズムに向かっていき、物語はより短くなっていきます。ジャン・フランソワ・マルモンテルは道徳的な物語を書いて人気を博し、このジャンルの父とされています。この傾向は、慣習という言葉通りの意味と同じくらいに、慣習を改革しようとする手本として、急速にヨーロッパ全土に広まりました。

例を挙げましょう。ヴォルテールの『カンディード』です。このフランスの作家は、天真爛漫な主人公を通して、時代精神、習慣の変化、政治の盲目さ、無意味な存在の分析などを描写し、批判しました。その結果、遊び心であろうと教訓的であろうと、物語は想像力だけでなく、官能性と異国趣味と自由を称えるものになり、さらに啓蒙主義者の哲学的思考を紹介することになったのです。こうして私たちは寓話の変遷を見ています。ロマン主義の形式から離れながらもその熱狂を忘れることなく、時にはドキュメンタリーのようなリアリズムへどんどん近づいていきました。

印刷の普及とともに短編小説の人気は高まり、多くの一流作家を惹きつけ、現代小説が広がりました。実際の出来事を語る中で驚きの展開を加え、日常生活に溶け込んだ想像の概念を発展させていったのです。エドガー・アラン・ポーの作品は、予想外の展開と内容で効果的な短編小説という文学をつくりあげました。

一九世紀にはグリム兄弟とハンス・クリスチャン・アンデルセンが地方の民話に関心を持ち、口承で伝わっていた物語を集めるという伝統を続けますが、物語の広がりは消えつつありました。異なるテーマにとりくむ新しい流れの作家が生まれ、モーパッサンよりもチェーホフを好むさまざまな読者に応えて、技巧的な筋書きを除外し、登場人物の内面を明らかにする小説に変えました。

第一次世界大戦後、伝統的な物語はその役割を小説や連載冒険物語に奪われました。

伝統的な物語は、新たなファンタジーを表現することで続いていきます。マスメディアは新聞、ラジオ、テレビ、さらに新しい技術で、想像力の供給の変化にますます影響を与えています。

二〇世紀は、「メディアはメッセージである」と言ったマーシャル・マクルーハンが予想した通りになりました。それでも、このカナダの社会学者は、一九七〇年代以降、人類の一世代全体が世界中のあらゆる地域で同時に同じヒーローに出会い、子どもや青少年向けのテレビ番組、アニメ、コメディやハイライト動画を楽しむようになるとは考えもしなかったと言っています。どこへ行っても誰の心にも同じヒーローが存在するという、比類なき世界です。

これは、数十億人の集団的空想の世界を変えた途方もなく大きな新しい現象です。私たちが見たり聞いたりする新たなヒーローは、マーケティングによってあらゆる形態で生産されていくものと同じです。なぜなら、世界中で認識されるようにそれぞれのキャラクターとそれに付属するものを複製しているからです。テレビやインターネットが国境をなくし、今では何百万人もの子どもたちが、もはや一つの文化には属さない同じキャラクターを共有し、同じファンタジーの世界で育っています。これが、世代から世代への行動にどの程度の影響を与えるかを評価するのは不可能であり、キャラクターの暴力性や優しさが子どもたちに似たような行動をもたらすか否かを判断することはできません。

大切なことは、時代と物語と歴史が変化するのに気づくことです。価値観や行動規範を伝えてきた口承の伝統は事実上消え去りました。しかし、共有するファンタジーの世界は、地球上の何百万もの人々を結びつける重要かつ不可欠なものであり、過小評価したり無視したりするべきではありません。

この本での私の願いは、集団的記憶に貢献することです。それぞれの地域に価値観や行動規範が表現された独自の文化があることを知り、それについて考えるようになってほしいのです。どの場所にも物語によって何千年ものあいだ伝えられてきた歴史があり、人類学者の言う「文化の個性」は、国や町や民族や集団社会、どんなものでも構いませんが、一つの「世界」に属しているのです。

欧州連合各国の主要な物語を集めたこの本の目的は、地域のアイデンティティを強調し、それぞれ

の文化が持つ独自の特徴を活かした物語を知ってもらうことです。それは、ゲニウス・ロキ（土地の守護精霊）を認めて内面化することによってのみ、人は集団社会の一員となり、それぞれの生き方や多様性を尊重し、理解することができるという深い信念から始まっています。

したがって、このプロジェクトの目的において、民話、物語、寓話、小説を区別することは重要ではありませんでした。けれども、それぞれの物語がそれを生んだ集団の規範となる価値観を表現しており、それにより子どもたちが世界観を形成して大人の世界に入っていく時に役立つことが大切だと考えました。何ヶ月にもわたる探究と分析と研究のあとで、学者にもこの選択の信頼性を検証してもらいました。

物語を選ぶ際に大切にした三つの観点は、まず、完結した物語であること、次に繰り返し伝えられてきた神話への言及があること、そして象徴的な登場人物がいることです。詳細な研究をした結果、寓話の構成にあたり関連する三つのジャンルを分類したシャルル・ペローの論理を使うことにしました。明白な寓意を含む話であること、口承でも写本でも原型を持つ話であること、意味を持つ話であることです。最初のものは寓話、二番目は物語、三番目は小説と呼ぶことができるでしょう。

だからこそ、おとぎ話は、ただ単に読んで終わる話ではなく考える役割を持つ物語としてとりいれられたのです。同時に、文字が生まれる前の時代から伝わるものであれ、ユダヤ・キリスト教の時代から継続するものであれ、両者をはっきりと区別せずに選択範囲に入れました。なぜなら研究の目的は架空の物語を通して欧州連合の神話と価値観と行動規範を特定することだったからです。

おとぎ話集の編纂と記載は恣意的なものなので、責任は編纂者の私にあります。ただ一つ、誠意を持って言えるのは、私はヨーロッパ諸国が共有する魂、つまりそれぞれの国を特徴づける目に見えないけれどもかけがえのない本質を求めて、数え切れないほどの寓話、伝説、小説、童話を読んだことです。

それは『物語の中の物語』以降の物語集をベースにして分析した社会学的な研究です。この方法で

ヨーロッパ諸国の学者たちに出したアンケートの答えを照合しながら最初の見本を作り、多くの賛同を得て収録作品を決めましたが、同時に文学者や言語学者、人類学者、哲学者のあいだでは意見が分かれたことも記しておきます。

私は究極の意味を探していました。価値観の共有を形成する集団的魂の基盤です。

この本の制作のおかげで私は、物語の世界に浸り、多くの空想の世界、多くの文化の中を生きることができました。そして、欧州連合が何千年も続いている存在であることを見出しました。なぜなら、東から西、北から南まで何世紀にもわたってヨーロッパの大地に暮らしてきた人々によって内在化された同じ価値観を伝えているからです。不思議に思うかもしれませんが、本書を読むと欧州連合が基盤とする価値観は本書のおとぎ話が伝えるものと同じだと気づくはずです。

この本では、ヨーロッパ大陸の国々のアイデンティティをつくる神話や価値観や行動規範をはっきりと特定して提示するために、有用な論理に従うよう努めてきました。ここで提示されたものは、欧州連合の二七の国々を特徴づける神話や行動規範についての長年にわたる粘り強い研究の成果です。そして、自由、民主主義、平等、人権、特にさまざまな理由でマイノリティに属する人たちの権利という概念を理解して共通の価値観を表現するものなのです。

何千もの物語の中から私が選んだのは、強い象徴性を持ち、それらが属する場所のアイデンティティを最も反映し、同時に、架空のヒーローの行動パターンが普遍的であることを示すものです。

ここに書かれた物語の本当の役割は、年齢の高低は関係なく、すべての少女や少年に、それぞれの物語の中の最も大切な意味を読みとる機会を提供することです。この本には神話や英雄の物語が尽きることがありません。勇敢なヒーローが登場する素晴らしい冒険物語がたくさんあるでしょう。幸せや民主主義をもたらす勇気あるヒーロー、忘れてはならないのは、謙遜や忍耐、連帯、そして何よりも愛と友情を称えるごく普通のヒーローがいるということです。

ヘンゼルとグレーテル

訳——村岡直子（Naoko Muraoka）
絵——ヒグチユウコ（Yuko Higuchi）

深い森の入り口の小さな家に、貧しい木こりのお父さん、むすこのヘンゼルとむすめのグレーテル、そしてきょうだいのまま母が暮らしていました。一家はとても貧しくて、ろくに食べるものもありません。ある晩、まま母がお父さんにいいました。

「このままでは食べていけないから、子どもたちを捨てないとね。明日、あの子たちを森のおくまで連れていって置いてこよう」

目を覚まして、すべて聞いていたヘンゼルは、どうにかしようと決意しました。その夜

は、空で月がこうこうとかがやいていました。ヘンゼルは、たとえ森に置きざりにされても、家への帰り道を見つける方法はないかと考えました。そこでねどこから起きあがり、小さなふくろに白い小石をぎっしりつめました。

次の日、まま母はふたりを森のおくに連れていきました。歩きながら、ヘンゼルはこっそりふくろを取り出し、道みち白い小石を落としていきました。家から遠くはなれた、木がうっそうとしげった場所につくと、まま母はいいました。

「ここで待っていなさい。あたしがもどるまで動くんじゃないよ」

そして、ヘンゼルとグレーテルを残してどこかに行ってしまいました。

ヘンゼルはこわくなりましたが、グレーテルにこういいました。

「心配しないで、グレーテル。帰り道は見つかるよ。森を歩きながら落としてきた白い小石をたどればいいんだ」

グレーテルはヘンゼルの手をにぎりしめて、暗い森を歩いていきました。やがて、ふたりは家に帰りつくことができました。

子どもたちが帰ってきたのを見ると、まま母はかんかんにおこりました。食べものはますますとぼしくなりました。何日かするとまた、まま母は子どもたちを捨(す)てにいこうと決めました。でも今回、ヘンゼルは白い小石を拾えませんでした。前の夜、グレーテルといっしょにたんすに閉じこめられてしまったからです。そこでかわりにパンくずを集めておきました。

ふたりはもう一度、森へ連れていかれて捨てられました。そこで前と同じようにして家に帰ろうとしましたが、パンくずは鳥に食べられてしまい、あとをたどることができません。帰り道がわからなくなり、ふたりは森でまいごになってしまいました。

おびえ、おなかをすかせてさまよっていると、木の枝のすき間から、遠くに光が見えました。近づいてみると、おかしでできた小さな家がありました。ヘンゼルとグレーテルは大喜びで、あめの屋根やチョコレートの窓をパリンと割って食べはじめました。

むちゅうで食べているそのとき、とびらが開いて、このおかしの家の持ち主である年とった魔女が出てきました。魔女は冷たい目に、いじわるな笑みをうかべていいました。

「おや、かわいい子たちだね。おなかがすいているのかい？　さあさあ、あたしのおかしの家にお入り」

魔女が悪いことをたくらんでいるとも知らず、ふたりは家に入りました。すると、魔女のたいどはがらりと変わりました。じつは、ふたりを食べるつもりだったのです！　魔女はヘンゼルをおりに閉じこめ、グレーテルにはかまどにくべるたきぎをとってくるようにいいつけました。

ヘンゼルには食事がたっぷり用意されましたが、グレーテルはクルミのからしかもらえません。毎朝、魔女はおりの前でどなりました。

「ヘンゼル、指を出してごらん。どれ、どのくらい太ったかな」

ヘンゼルは、指のかわりにおりのなかにあった小さな骨をさしだしました。目の悪い魔

女は、その骨がヘンゼルの指だと信じこみ、ちっとも太らないのをふしぎがりました。
四週間たちましたが、ヘンゼルが太らないので、魔女はしびれをきらしました。もう待てません。
「グレーテル、すぐにかまどに火をおつけ。太っていようがいまいが、かまわない。あたしゃあの子を料理するよ」魔女がどなりました。
ゆうかんで頭のいいグレーテルは、魔女にたずねました。
「どうやってかまどに火をつけるの？」
魔女はやりかたを教えましたが、グレーテルはわからないふりをしました。しばらくすると魔女はいらだちながら、グレーテルにいいました。
「かまどの中に入って、じゅうぶん熱くなっているかたしかめてごらん」
グレーテルはこまったふりをしていいました。
「こんなせまいところには入れないわ。どうすればいいか、やってみせて」
自分のほうがかしこいと思っている魔女は、かまどに近づいて体をかがめ、説明しようとしました。
「ほら、かまどの口はこんなに広いんだから、あたしだって入れるよ」
するとそのときグレーテルは、魔女をかまどにおしこみました。そうしてとびらを閉め、かけがねをかけました。かまどの中からさけび声が聞こえ、とうとう魔女は死んでしまいました。

ヘンゼルとグレーテル

ついに、悪い魔女から自由になったヘンゼルとグレーテルは、家の中をたんけんし、宝石がぎっしりつまったふくろを見つけて、持って帰ることにしました。そのあと、親切な小鳥に道を教えてもらい、ようやく家まで帰りつくと、大好きなお父さんの腕の中に飛びこみました。欲深いまま母は家を出ていき、木こりのお父さんはひとりで暮らしていたのです。

助けあいながら不運を乗りこえ、魔女を打ち負かして帰ってきたヘンゼルとグレーテルは、ますます仲よくなり、それからは幸せに暮らしました。

巨人と仕立屋

訳——村岡直子 (Naoko Muraoka)
絵——浦上和久 (Kazuhisa Uragami)

オーストリアの山の中、ぽつんとはなれた村に、気だてがよくかしこいことで知られる仕立屋がおりました。お客さんのために、とてもていねいに服をぬうので、村人たちから愛されていました。腕がよくて礼儀正しく、遠くからも大ぜいの人びとが服を仕立てにやってきました。

ある日の夕暮れ、高い木の枝がからまりあって、ほとんど光がささない深い森を歩いているとき、仕立屋は巨人に出くわしました。とてつもなく背が高くて毛むくじゃら、ぎざぎざの歯をむきだしにし、なんでもひとのみにしそうなおそろしい顔をしています。ぎら

ぎらした目ににらまれて、仕立屋はちぢみあがりました。巨人が、何百年も前から地面にどっしり根をはった大木だとしたら、仕立屋はそのそばで風にゆれている、一本の草のようなものでした。

巨人はよだれをたらしそうな顔で、小さな仕立屋をじっと見つめてから、取って食おうというようにかがみこみました。すると、身を守ろうとして仕立屋がかざした腕に、巨人のぼさぼさした髪の毛がふれそうになりました。

仕立屋は、ふるえながらいいました。

「りっぱな巨人さん、わたしはこの小さな村の、ただの仕立屋です。どうかにがしてください」

「おう、仕立屋か。腹ぺこのおれさまがいただくのにふさわしい、うまそうなえものがようやく来たな」巨人が、とどろきわたるような声で答えます。

仕立屋は、声をふるわせながらいいました。

「お願いです、巨人さん、見のがしてください」

でもそのとき、強くてえらそうな巨人から身を守るには、こわがっていないで、ここは頭を働かせるしかないと仕立屋はさとりました。そこで、すばやく考えをめぐらせて、ほほえみながらいいました。

「りっぱな巨人さん、そんなに急いでわたしを食べないほうがいいですよ。やせっぽちのわたしを食べても、おいしくありませんから。こうしたらどうでしょう。わたしは料理が

とくいなのです。一日時間をくださったら、これまで食べたことのないほどうまい料理をたっぷりとこしらえましょう。何がお好きですか。がっかりはさせませんよ」

巨人は仕立屋をまじまじと見ました。巨大な顔がせまってきて、仕立屋は巨人しか見えなくなりましたが、へいきそうに見せようと親しげにウィンクをしてみせました。すると、巨人がその気になってきたので、すかさずこういいました。

「明日、この場所で同じ時間に、あなたとわたしのふたりだけで会いましょう。まあ見ててください、忘れられない夕食をごちそうしますよ」

巨人はたっぷりとしたうまい食事にそそられて、仕立屋の細い腕から顔をはなして、体を起こしました。それから仕立屋にさそわれるまま、好きな食べものを説明していきました。にがいものよりあまいもの、うすい味よりしょっぱいもの、肉はいっぱい野菜は少なく、やわらかいくだものよりかたいくだもの。次の日に食べられると思うだけで、巨人はつばがわいてきましたが、おどすのは忘れませんでした。

「明日の同じ時間にかならず、ちょうどよく焼けた肉、炭火であぶって塩をたくさんふったジャガイモ、いろんなかたいくだものが入ったかごを持ってここに来い。そうそう、ワインをぐびぐび飲みたいから、大きなびんにたっぷり入れてこい。約束を守らなければ、どこまでもおまえをさがしにいって、ひとのみにしてやる。そのちっこい体じゃ、とても腹いっぱいにはなるまいが、足りなきゃおまえのお客や友だちもがつがつ食ってやる。わかったな」

巨人はそういうと、かみなりのようなせきばらいをして頭をうしろに引いたので、髪の毛がまきおこした風で、仕立屋はひっくりかえってしまいました。それから巨人はくるりと向きを変え、じゃまな木や草を大きな手でひっこぬいては道をつくり、あらい息をふきかけて動物を追いはらいながら森の中を去っていきました。

仕立屋はあっけにとられていました。まだ生きているのが信じられません。ふるえながらもそろそろと身を起こし、何度か大きく息をつき、動けるようになるとすぐ、巨人とは反対の方向へ走りだしました。

どうにか家に帰るやいなや、仕立屋はベッドに身をなげだして考えました。自分が食べられないためにも、大切な友だちやなじみのお客さんをまきぞえにしないためにも、巨人の望みをかなえる方法を見つけなければなりません。

でも、どうすればよいのでしょう？　おびえてつかれきった仕立屋は、そのままねむってしまいました。

目が覚めると、休んだおかげで元気を取りもどし、すばらしい考えがひらめきました。まずはじょうぶな大きいふくろを三つ探してきました。それから一つ目のふくろには干し草を、二つ目のふくろには川原の丸い石を、三番目にはくさったくだものをつめました。干し草をつめた最初のふくろはほくほくのジャガイモ、丸い小石がぎっしり入った二番目のふくろは焼いた肉、くさったくだものだらけの三番目のふくろは、ほっぺたが落ちるほどおいしいくだものだといって巨人にわたすのです。だますことになりますが、ざんこく

でいばりんぼうの巨人に食べられないようにするためにはしかたありません。

仕立屋はふくろの口をたくみに糸でぬいつけ、前の日と同じ日暮れごろ、ごちそうをつんだ荷車を引いて森に向かいました。約束の場所に着くと、丸太をテーブルのように並べ、その上に三つのふくろを置きました。

巨人は仕立屋のもてなしに感動し、食べものが入った大きなふくろが三つもあるのを見ると、おそろしげな目をきらりとかがやかせました。干し草が入った一つ目のふくろを味わいもせずまるのみにし、二つ目の石のふくろもあっという間に食べました。三つ目のくさったくだものもまたたくまに、がつがつとむさぼりました。

「お口に合いましたか？」小さな仕立屋がたずねました。

「もちろんさ。だが、あんまり腹がへってたもんだから、味わうひまがなかったよ。ああ、まだ腹がへってるな」巨人が答えました。

あれだけ食べてもおなかいっぱいにならないとは、なんという食欲でしょう。仕立屋はおどろきましたが、いばりんぼうの巨人をなんとかへこましてやろうと考えめぐらせ、ほほえんでいいました。

「りっぱな巨人さん、わたしの料理の腕は、あなたのするどい味覚と大きな胃ぶくろにはとてもかないません。こうなったら、あなたの力をもっと見せてもらえませんか。あなたならどんなことでもやってのけられるでしょう！」

おだてられてその気になった巨人は、力試しをすることにしました。そこで仕立屋は、

できそうにないことを、つぎつぎとお願いしていきました。
「りっぱな巨人さん、あなたのとほうもない力でこの岩から水をふきださせてください」
巨人は、かちかちにかたいかべのような岩を、むきになってたたいたりけったりしはじめました。でも、ゆれることはあっても、水はほんの一滴も出ません。いらいらして巨人はいいました。
「別の試練をくれ、きっとやりとげてみせるぞ。この岩ときたら、かたすぎるんだ」
「もちろんですとも」と小さな仕立屋は答えました。「では、石を投げて月に当ててください。力持ちで器用なあなたならかんたんでしょう」
「はっ！」巨人は答えました。「そりゃかんたんだ、おれはタカのように目がよくて背が高いんだ。ねらいをさだめて投げれば、たやすく月にとどくさ」
巨人はそういって石を投げましたが、石は地面に落ちてくるばかり。何度投げても月にはとどきません。
自信がなくなってきた巨人は、別の試練をたのみました。
仕立屋はにやりとしていいました。
「ねえ、りっぱな巨人さん。あなたがどれだけ力持ちでも、限界はあるんです。だけどいいですよ、これが最後の試練です。この世でいちばん強い巨人にしかできないことです」
仕立屋は何百年も前から立っている木を指さし、告げました。「この木を地面からすっぽりひっこぬいてください。あなたが何者か、世界に見せてくださいね」

自分の力を見せてやろうと、巨人は木をしっかりとつかみ、右へ左へと力のかぎり引っぱりました。ありったけの筋肉を使って、あせびっしょりになってぜえぜえと息をつき、巨大な頭まで使って幹をおしましたが、木はぬけません。その間に仕立屋はうしろにこっそりまわりこんで、斧で根っこを切りました。いっしゅんでたおれた木が思いきり頭にぶつかって、巨人はころんでわめきました。

「なんだ？　どういうことだ？」

「おお、りっぱな巨人さん、いつも力が勝つとはかぎらないのですよ。ときには、かしこさが真の勝利をもたらすことがあるのです」仕立屋がいいました。

ぬけめのない仕立屋にしてやられ、巨人は信じられない気持ちで口をぽかんと開けていましたが、やがて感心していいました。

「すごいぞ、仕立屋！　こんなに小さいくせに、こんなにかしこくなれるとは。あんたは見かけよりずっとすごいやつだな」

仕立屋はしずかに答えました。

「ねえ、りっぱな巨人さん。偉大さは腕力にではなく、心に宿るものなのです。そしてあなただって、力をとうとい目的のために使うなら、自分で思っているよりももっとすばらしい人になれますよ」

その日から巨人は、仕立屋を深く尊敬するようになり、生き方を変えました。弱い人のために協力し、頭を使って意味のある行動をとるようになりました。えらぶるのをやめて、

みんなと仲よくし、よき友の仕立屋に感謝して、幸せに暮らしました。みえっぱりで自信のないおろか者だけが、弱くて寄るべのない人をまかすために力を使うのだ、偉大さとは体の大きさではなく心しだいなのだということを、仕立屋に教えられたからです。

ティル・オイレンシュピーゲル

訳——村岡直子 (Naoko Muraoka)
絵——牧野千穂 (Chiho Makino)

ずっとむかし、フランドル地方に、ティル・オイレンシュピーゲルという名の頭のよい若者がいました。ティルは、君主やいばった人には生意気ないどをとりましたが、それは弱い者を守るためでした。

ある日、ティルが歩いていると、金持ちの商人がめし使いにひどいたいどをとっているところに出くわしました。自分の富や権力をひけらかして、めぐまれない人たちをからかっています。

ようし、ちょっとこらしめてやろう、とティルは思いました。そこで商人に近づき、に

こやかに話しかけました。

「おはようございます、商人のだんな。あなたは心が広く、とても気前がいいと聞きました。村のめぐまれない人たちのために、少しばかりほどこしをいただけませんか」

商人は、心が広いと人から思われたかったので、こう答えました。

「おお、もちろんだよ、若い人。ほしいものをいいなさい。なんでもやろう」

ティルはしめしめと思いましたが、気持ちをかくしていいました。

「あなたは親切なお方で、めし使いを同じテーブルにつかせて食事をとらせると聞きました。ぼくもごいっしょして、昼食をごちそうしていただけませんか」

これまで人を食事にまねいたことなどなかった商人はびっくりしました。でも気がすすまないようすやとまどいを見せてはなるまいと、このふうがわりなたのみを聞きいれ、ティルを家まで連れていきました。家にはすでに昼食の用意ができていました。

食事の席につくと、ティルはずけずけといいました。

「気高い商人さん、めし使いたちにどれだけ広い心で接していらっしゃいますか。どのようにたいせつにあつかい、どんな自由をあたえておられますか」

商人はなにもいわずに目をそらしましたが、ティルは、さらにいいつのりました。

「同じテーブルで料理を分け、めし使いたちの話を聞いたり、必要なものはないかとたずねたりするというのはほんとうですか」調子づいて、さらにつづけます。「あなたがやとっている人が、どんなところで暮らしているか、考えたことはおありですか。せまくて寒

い部屋を見たことは？　あなたはぜいたくな暮らしを楽しんでいるというのにね」

　商人はだまりこんで目をふせました。思いあがっていた商人は、自分とちがう暮らしをおくっている人のことなど、今まで考えたこともなかったのです。

「めぐまれない人を助ける機会があれば、何をしますか？　自分の財産を守るほうがいいですか、それともまわりの人と分かちあいますか？　気高さとは、ほんとうはどういうことか、考えたことがありますか？　気高さとは、家がらではなく、とうとい精神と、だれにでもつつましやかなたいどをいうのです」

　ティルが言葉を重ねるたびに、商人はどんどん居心地が悪そうになり、食事が終わるころには、自分をはじてうつむいてしまいました。人間のほんとうの偉大さは富や権力にあるのではなく、つつましく、だれにでも敬意をはらうことだと気づかされたのです。

　その日から、商人は心を入れかえ、つつましく、あわれみぶかい人になりました。

　またあるとき、ティル・オイレンシュピーゲルは村の人びとをしいたげる、横暴でざんこくな領主と出会いました。農民たちは、重い税をとりたてられて苦しんでいました。ティルは不公平なことをやめさせようと決心しました。

　ティルは農民のすがたで、村人のなかにまぎれこみました。ちょうど村人たちは、民を大事にせず、とぼしい賃金できつい仕事をおしつける領主に対して反乱を起こそうとしているところでした。そこでティルは知恵と機転で、村人たちが暴力を使わず領主に立ち向かうようしむけました。そしてせつせつとうったえかけて、農民たちの権利の大切さ

を領主にわからせ、公平な約束をとりつけることに成功しました。

こうしてティルは人びとからしたわれる英雄になりました。そして今も、公平さと自由のシンボルとしてたたえられています。

かくされた宝

訳——村岡直子 (Naoko Muraoka)
絵——門田千明 (Chiaki Kadota)

むかし、ブルガリアの山おくの小さな村に、イヴァン、ディミタル、ペタルという名の三人兄弟が暮らしていました。三人とも好奇心がおうせいで、ぼうけんが大好きなことで知られていました。

ある日、兄弟が森を散歩していると、ふしぎな声が聞こえてきました。何百年も前から立っている、古いナラの木がうたうようにささやいているのでした。

「ゆうかんな兄弟たちよ、かくされた宝を見つけて富み栄えたいと思うなら、旅に出て、そびえ立つ山をこえ、三つの大きな試練を乗りこえるのですよ」

いちばん年上で、強い意志の持ち主のイヴァンはこう答えました。
「どんな困難が待ちうけていようと、こわくなんかない！　ぼうけんにいどみ、かくされた宝のなぞをときあかしてみせよう」
こうして次の日の夜が明けると、三人兄弟は食べものをつめたふくろをせおい、山へ向かって歩きはじめました。何時間もかけてけわしい坂をのぼり、深い森を歩くうち、流れのはやい川に行きあたりました。すると目の前に、つやつやと光りかがやく毛なみをした、ヴァシルカという名のキツネがすがたをあらわし、三人をじっと見ていいました。
「川をわたるには、最初の試練を乗りこえなければなりません。これから出す問いに答えられたなら、水のなかを案内してあげましょう。では聞きます、人間のいちばんの長所とはなんですか」
イヴァンはキツネに近づき、自信をもって答えました。
「それはつつましい心です。つつましさがあれば、世界の大きさがわかり、思いあがることなくまわりから学べます」
ヴァシルカはうなずき、三人を川へとみちびきました。すると川は魔法のように、さっとふたつに分かれました。
川の試練を終えると、こんどは天までとどくけわしい岩山が兄弟を待ちうけていました。目つきがするどく、あつい毛皮でおおわれた物知りオオカミ、ボリスがあらわれていいました。

「この山に登るには、勇気と決断力が必要だ。こわさを乗りこえ、苦しくてもしんぼうするかくごを持った者だけがやりとげられる。困難に立ち向かえばむくわれるだろう」

二番目のディミタルが進みでて、きっぱりといいました。

「ぼくが最初に登ります！　いかなる困難が待ちうけていようと、おじけづいたりしません！　どんなじゃまが入ろうとも、乗りこえてみせます」

そしてディミタルは登りはじめました。イヴァンとペタルもすぐあとに続きました。けわしい坂道と深い谷もなんのその、三人は決してあきらめることなく、はげましあってがんばり、頂上にたどりつきました。

山のてっぺんには、星のようにかがやく目をした、ガヴリロという名の物知りフクロウがいました。このフクロウこそが、かくされた宝の見張り番でした。ガヴリルはいいました。

「あなたたちはゆうかんでしんぼう強く、困難を乗りこえてここまでたどりつきました。さあ、求める宝を手に入れるには、最後の質問に答えてください」

末っ子で頭のいいペタルが進みでて、耳をかたむけました。

「人間が持つ最大の宝とはなんでしょう?」

ペタルはちょっと考えてから答えました。

「人間が持つ最大の宝とは、愛情と、大切な人たちと幸せを分かちあうことです。人生を豊かにするのはまわりの人とのつながりとやさしさです」さらに少し間をおいて、こう

つけくわえました。「ぼくたちの心にあるもっとも大事な宝とは、愛であり、人に喜びをあたえることです」

ガヴリルはほほえんでうなずき、羽ばたきをして山の方を指しました。ペタルたちがそちらを見ると、山がぱっくり割れ、かがやくどうくつがあらわれました。そこには金貨やきらめく宝石など、宝ものがどっさりと入っていました。

信じられない気持ちと喜びにあっけにとられて、三人兄弟は目もくらむような財宝を見つめました。けれども、そこですぐに気がつきました。ほんとうの宝とはここにある富ではなく、旅の間に得た経験と知識なのだと。

三人は大金持ちになって村に帰りました。しかし、財宝よりもっと値打ちがあるのは、兄弟同士の愛情ときずなでした。そこで三人は、手にした富で必要としている村人のために学校や病院を建てました。

かくされた宝の話は遠くの村まで伝わりました。そして、それを知った多くの人びとも、愛情や心の広さ、人と分かちあう幸せのなかにある、ほんとうの富を求めるようになりました。

三人の兄弟は、それからも新しいぼうけんにいどみ、まわりの人と富を分けあって暮らしました。村人たちとともにすごし、身の上話に耳をかたむけ、喜びと悲しみを分かちあうのを好み、物知りの助言者として、信用できる友人として、村じゅうからしたわれました。

ヘビのおきさき

訳——村岡直子 (Naoko Muraoka)
絵——網中いづる (Izuru Aminaka)

はるかむかしのこと、やさしい陽の光がふりそそぐキプロスの島に、エレナという名の美しい王女が住んでいました。大理石のようなはだに絹のような髪、ひとみは星のごとくきらめいています。あまりの美しさに、若者たちは王女を一目見ただけで胸をときめかせました。

ある日、王女がお城の庭を散歩していると、ふいにきみょうな生きものがあらわれました。それはかがやくうろことするどい目をした巨大なヘビでした。ヘビは、思わずひきこまれるひくい声でこういいました。

「エレナ王女、おまえはわたしのきさきになるのだ！　トロードスの山の下にあるわたしの王国に来なさい。ともに末永く国を治めよう」

エレナ王女はおどろきましたが、こわさよりも勇気のほうがまさっていたので、きっぱりといいかえしました。

「あくどいヘビ、あなたのいうとおりになんてならないわ！」

ヘビはとがった歯をむきだしにして、不気味に笑いました。

「来たくないというのなら、力づくでつれていくまでだ！」

そういうがはやいか、ヘビは巨大な体を王女にまきつけ、トロードスの山の地下にあるねぐらへとさらっていきました。王女は毒ヘビがうごめく暗やみで、とらわれの身となりました。

けれども、運命は王女にひとすじの希望を残していました。王女がさらわれたというおそろしい話をききつけた、ニコスという名の若くゆうかんな王子が、救いにいこうと決意したのです。一本のつるぎと勇気だけを武器に、王子はトロードスの山へと向かいました。

何日も苦しい旅をして、ニコス王子はついに、ヘビのすみかにたどりつきました。迷路のような暗いどうくつを通りぬけ、危険な目にあいながら命がけで、ようやく、王女が閉じこめられているろうやを見つけました。

「エレナひめ！」答えが返ってくることを願って、王子は呼びかけました。

「そこにいるのはだれ？」王女が答えました。弱々しいけれども期待のこもった声でした。

「ニコス王子だ！　きみを救いに来たんだ！」若き英雄は高らかにいいました。

そしてさっとつるぎをつかむと、ねらいをたがえず、王女をとらえていたくさりを切りおとしました。ふたりはヘビのすみかからにげようと、光がさすほうへ向かって走りました。

けれどもあくどいヘビは、かんたんにはあきらめません。火をふき、毒をまきちらしながら、王女と王子を追いかけました。しかし、王子の勇気と王女の希望のほうがまさっていました。

ニコス王子は先祖代々伝わる、古い強力な呪文を思いだしました。魔法の言葉をとなえると、ふたりとヘビの間に光のかべがそびえたちました。

ヘビはあとずさりし、おこってどなりながら、夜のやみのなかに消えていきました。エレナ王女とニコス王子はたがいの腕のなかに飛びこみました。つかれきっていましたが、幸せでした。

「おかげで助かりました」エレナ王女は感謝にひとみをかがやかせてささやきました。

「いとしい王女さま、きみをさがすためならぼくは、世界じゅうどこまでも行きますよ」王子はやさしく答えました。

王子と王女は歩き続けて、ある村にたどりつきました。そこでは村人たちが盛大にうたげを開いてふたりをむかえてくれました。あくどいヘビに勝ったことを祝って、人びとはふたりを囲んで歌い、おどりました。

すると、村の長老がやってきて、おごそかに告げました。

「あなたがたは力を合わせて、ヘビを打ち負かしました。おかげでわれわれは心に希望を取りもどすことができました。キプロスはいつまでも、あなたがたの愛情と勇気に感謝することでしょう」

エレナ王女は幸せにひとみをかがやかせてニコス王子を見ました。

「いとしい人よ、ともに困難を乗りこえて、幸せを勝ちとったのですね。さあ、これからは、この国を愛と正義で治めましょう」

勇気あふれるニコス王子がエレナ王女を救ったという知らせは、またたく間に国じゅうに広がりました。人びとは王女がもどったのをにぎやかに祝い、教会のかねが鳴りひびきました。

ニコス王子とエレナ王女はキプロスの王と女王になり、一生仲よく幸せに暮らしました。ふたりの物語は伝説となり、愛を信じ、望みをかなえるために戦うことの大切さをのちの人びとに伝えました。希望と愛と勇気はあらゆる悪に打ち勝ち、幸福をもたらすのです。

金色の魚

訳——村岡直子 (Naoko Muraoka)
絵——寺澤智恵子 (Chieko Terasawa)

むかし、クロアチアの海辺にある絵のように美しい村に、マルコという名の貧しい漁師が住んでいました。毎朝マルコは、家族をやしなえるだけの魚がとれるよう願いながら、夜明けどきに小舟を海にこぎだしました。

ある日、海に出ていたマルコは、波の間で何かがはねているのに気づきました。ふしぎに思い、舟を近づけると、とつぜん、美しい金色の魚があらわれて、舟のまわりを泳ぎまわりました。うろこは太陽のようにかがやき、うっとりするような光を放っています。マルコはその美しさに心をうばわれましたが、同時にこわくもなりました。

あみを投げるとかかったので、すくいあげようとすると、そのきみょうな金色の魚は歌うようにマルコに話しかけました。

「やさしい漁師さん、ぼくは特別な金色の魚です。元の海に帰してくれるなら、ご恩は忘れません。ぼくはまだ若いから、仲間といっしょに海で暮らしていきたいのです」

マルコはためらいました。こんな魚は見たことがありません。つって帰ったら村の人たちはどんなにおどろくでしょう。でも、こういう魚は、やはり海のなかでかがやき続けるべきかもしれません。

そんなふうにまよっていると、苦しそうにあえぎながら魚がいいました。

「ぼくを生かしてくれるなら、お礼に三つの願いをかなえてあげますよ」

なんと運がいいのでしょう。マルコはよい機会がめぐってきたことに感謝して、なにをたのもうかと思いをめぐらせはじめました。けれども、少し考えてこう答えました。

「すばらしい魚さん、おれは金も権力もいらない。おれが願っているのは、村と、村の人びとの幸福だけだ。いつでも海で魚がたくさんとれて村が栄え、みんなが幸せになれればいい」

金色の魚はにっこり笑ってうなずき、いいました。

「では、そうなるようにしましょう、漁師さん。あなたの望みはかなえられますよ」

希望と感謝で胸をいっぱいにして、マルコは魚をにがし、村にもどりました。

そのときから、すばらしいことが起こりました。マルコの願いに答えるように、おいし

い魚がどっさりとれるようになったのです。海と心がかよいあって村は栄え、村人たちは海のめぐみに感謝しました。

ある日、マルコが港で舟の修理をしていると、イヴァンという金持ちの商人がやってきました。欲深いこの商人は、富をひとりじめにすることばかり考えていました。マルコのうわさを聞いて、金色の魚をつかまえ、魚の魔法の力で自分もひともうけしたくなったのでした。

イヴァンはマルコに近づき、ねこなで声でいいました。

「すばらしい金色の魚を見つけたそうじゃないか。わたしをその魚がいるあたりにつれていってくれ。望むものすべてを手に入れたいんだ！」

マルコはあやしむようにイヴァンを見て答えました。

「金色の魚はめったにないおくりものだよ。魚の魔法の力は、村のみんなに喜びと豊かさをもたらすためのものだ。ひとりの欲とわがままでけがすわけにはいかないよ」

けれどもイヴァンはマルコの言葉を聞こうとせず、それならば自分で金色の魚を見つけてやる、と海に入っていきました。何日もさがして、イヴァンはとうとう魚を見つけました。けれどもイヴァンの欲深さに気づいている金色の魚は、きびしい口調でいいました。

「心ない人間め、あんたの望みをかなえるわけにはいかないよ。ぼくの力はみんなの幸せと豊かさを願う人のためにあるんだ」

イヴァンは腹をたて、なんとしても思いどおりにしようと、大きなあみで金色の魚をつ

かまえにかかりました。でも、魚は魔法の力でするりとあみからのがれ、波の間にすがたを消しました。

イヴァンはがっくりして村に帰ると、自分のわがままなふるまいをふりかえりました。すると広い心を持ち、人を愛することのほんとうの値打ちをさとりました。イヴァンは心をいれかえ、村人や貧しい人びとのために富を使いはじめました。

イヴァンが変わったというわさは、やがて金色の魚の耳にとどきました。心を動かされた魚は、ふたたびマルコの村にあらわれ、イヴァンをほめたたえました。

「イヴァン、あんたは人のためを思う広い心を持つようになったんだね。それなら力を貸そう。村人たちが栄え、幸せに暮らせるように、ぼくの魔法の力を分けてあげるよ」

そこでイヴァンは、金色の魚にあたえられた富と力を、村のみんなのために使いました。こうして村はどんどん豊かになり、かつてないほどに栄えて、まわりの村々のよい手本となりました。

人魚ひめ

訳——村岡直子 (Naoko Muraoka)
絵——門田千明 (Chiaki Kadota)

むかし、海の底の王国に、アリエルという名の美しい人魚がおりました。女の子ばかりのきょうだいの末っ子のアリエルは、人間の世界を見たくて仕方がありませんでした。

ある日、海面の近くを泳いでいると、大きな船が燃えているのが見えました。海にのがれた人たちが必死で助けを求めているのを見て、アリエルの目はあわれみでいっぱいになりました。

アリエルはためらうことなく船に近づき、海にただよう人たちを次から次へと助けまし

た。そのなかに、流木にしがみついたエリック王子がいました。アリエルは近づいていき、力強くしっかり王子をわきにかかえ、だれかに見つけてもらえるようにと岸辺まで送りとどけました。

王子は目覚めたとき、家来たちに囲まれていました。そして、だれが自分を救ってくれたのか、気づくことはありませんでした。

アリエルは海に帰りましたが、王子と陸の世界のことが頭からはなれません。人間世界をもっと知りたくてたまらなくなり、たいへん物知りな、自分のおばあさんにたずねてみると、こういわれました。

「人間は、わたしたちよりずっと命が短いのだよ。だけど死んだら、たましいは永遠に残る。海のあわになってしまう人魚とちがってね」

アリエルは人間になりたいと願い、そのために必要なことはなんでもしようと心に決めました。そこで、悪いうわさをあれこれ聞いていましたが、魔女のウルスラに会いに行きました。

アリエルがたずねていくと、ウルスラはいいました。

「おまえがなにを望んでいるかはよく知ってるよ、ばかばかしい。魚のしっぽのかわりに、人間みたいに歩くための棒が二本ほしいんだろ。でも、望みをかなえてやろう。もし若い王子に愛されたなら、おまえは永遠のたましいを手に入れられるからね」

そういって魔女はけたたましく笑いました。不気味な笑い声に、アリエルはふるえあが

りました。

「薬をせんじてあげよう。それを持って、夜が明ける前に岸辺まで泳いでいって飲むんだよ。そうすりゃしっぽが分かれて人間が脚と呼んでいるものに変わる。おまえを見ればみんな、こんなにきれいな女の子は見たことがないっていうだろうね！　でも痛いよ、とがったつるぎにつらぬかれるみたいにね。そっと歩いたって、一歩ごとにナイフをふんで、血が流れるような心地がするよ。それを全部がまんできるなら、助けてやろう」

「がまんしますとも！」声をふるわせ、アリエルはいいました。そして王子のこと、永遠のたましいを手に入れることを考えました。

「だが、いいかい。ひとたび人間のすがたになれば、もう人魚にはもどれないよ。それに王子に愛されてけっこんできなければ、人間のたましいも手に入らない。もし王子がほかのむすめとけっこんすれば、おまえは海のあわとなるんだ」と、魔女がいいました。

「それでもいいわ！」アリエルはいいました。

「だけどわたしにお礼をしてもらわなくちゃね。それも、ちっぽけなものではだめだ。おまえの声は海じゅうでいちばんきれいだ。それをわたしにおくれ。魔法の薬とひきかえに、おまえが持っているなかでいちばんいいものがほしいんだ」

　王子のそばにいられるという喜びで頭がいっぱいのアリエルは、ためらうことなくうなずき、岸辺まで泳いでいくと、魔法の薬を飲みました。すると光がうずを巻くなかで、人魚のしっぽが人間の二本の脚に変わり、アリエルは地面に立っていました。新しい脚はた

よりなく、まだよろよろとしていましたが。

話すことも歌うこともできないのに気づくと、アリエルの顔はくもりました。けれどもアリエルを見た王子は、たとえ声が出なくても、その美しさとなぞめいたふんいきに夢中になりました。そこでアリエルを城につれて帰り、自分のそばに置きました。

月日が流れました。言葉で愛を告げることのできないアリエルは、どうにかして気持ちを伝えようともがいていました。まなざしやしぐさでわかってもらえるのでは、と内心期待していましたが、なかなかそうはなりませんでした。

ある日、ある若いひめが王子を訪ねてきました。ふたりが心を通わせあうようすを見て、アリエルの心はくだけました。王子にとって自分は、一生愛しぬく相手ではなく、ただのかわいい友だちでしかないとわかったからです。

絶望したアリエルは、海へと走りました。流したなみだが、海の水と混ざりあいました。愛のためにすべてをぎせいにしたのに、王子とけっこんするという望みが消えてしまったのです。こんな苦しみがあるでしょうか。

魔女のウルスラに知恵をさずけてもらおうと、アリエルは深い海の底にもどりました。魔女は意地の悪い笑みをうかべて、アリエルにささやきました。

「海の底の王国にもどる方法はひとつある。でもそれには、いまわしいおこないをしなければならない。王子を殺し、その血をおまえの脚にかけるのだ」

王子を深く愛しているアリエルに、どうしてそんなおそろしいことができるでしょう。

アリエルの顔はまっ青になりました。それならすべてを失ったほうがましです。自分のために、罪もない愛する命をうばうわけにはいきません。

アリエルは陸にもどり、がけから身を投げました。けれども、アリエルは死ぬかわりに、ふしぎな変化をとげました。体がとけて、光りかがやく空気のかたまりになったのです。はかなげな羽が生え、風がひとふきすると空中にうかびあがりました。アリエルは空気のむすめになりました。空を飛び、雲の中でおどるふしぎな存在です。

体はなくなりましたが、アリエルはこの新しいすがたになって幸せでした。今や人間の世界と海の底の王国を行き来して、そのどちらにも光と美しさをあたえることができます。おどったり飛んだりして、行く先々に希望と愛を運ぶアリエルを見た人たちの心には、もう失われたはずの美しい声がひびきわたりました。

陸地に住みたいと強く願った、かつて人魚だったアリエルは、こうして自分なりの幸せの形を見いだしました。愛がたどる道はさまざまであり、ほんとうの美しさは心のおく深くに宿るものなのです。

ラバの頭の裁判官

訳——村岡直子 (Naoko Muraoka)
絵——祖敷大輔 (Daisuke Soshiki)

スロバキアにある、うっそうとした森と青々とした牧草地に囲まれた美しい村に、とても変わった顔の裁判官が住んでいました。首の上に乗っかっているのが人間の顔ではなく、ラバの頭だったのです。そのきみょうな外見にくわえて、裁判官は物知りで、公正なさばきをおこなうことでも知られていました。

国じゅうのあらゆる地方から、この裁判官のいる裁判所に人びとがはるばるやってきて、公正にさばいてもらおうと、うったえを起こしました。

法廷には色とりどりのカーテンが下がり、こみいったもようのじゅうたんがしきつめられ、いちばんおくにはりっぱな木ぼりのいすが置かれていました。背が高い裁判官はそこに堂々と座っていましたが、首から上は耳の大きなやさしいラバの顔なので、それはなんともふしぎなながめでした。

ある日、おりこうペテルと呼ばれる男が法廷に入ってきました。真実をねじまげ、自分が得をするために他の人を平気でだます男でした。ペテルは、牛をぬすまれたといって正直なとなりの男をうったえました。ばいしょう金を目当てに、ありもしない犯罪をでっちあげたのです。

おりこうペテルはいいました。

「裁判官どの、わたしは重大な不正をうったえるため、ここに来ました！　となりの男に牛をぬすまれたのです。どうか公正なおさばきを！」

ラバの頭の裁判官は答えました。

「それは気の毒なことですね、ペテル。しかし、わたしの仕事は両方の話を聞いて真実を探すことです。その男をここに呼びなさい、裁判にとりかかりましょう」

法廷に入ってくると、男はいいました。

「ラバの裁判官どの、わたしはけっして、ペテルの牛をぬすんでなどいません。わたしは正直者で、罪をおかしたことなどありません」

ラバの頭の裁判官は男に、話してくれた礼をいってから、ペテルのほうを向きました。

「ペテル、この男がぬすんだというしょうこはありますか？」
おりこうペテルはいくつかのものを見せました。
「これが、この男が牛をぬすんだことを示すしょうこです。罪をおかしたのは明らかです」
裁判官はしょうこの品を調べ、何か反論はありますかと、となりの男にたずねました。
正直者の男は答えました。
「ラバの裁判官どの、わたしは生まれてこのかた、ぬすみをしたことなどありません。法律をきちんと守る正直な農夫です。どうか、真実を明らかにしてください」
両者のいい分をじっくり聞いたラバの頭の裁判官は、ふたりに向かっていいました。
「よくわかりました。それでは、真実を見つけるために試してみたいことがあるのですが、ペテル、よろしいですか？」
「もちろんです」
ペテルはそう答えました。すると裁判官は、つっかえることなく、はっきりと〈ラバ〉といってみるようにとペテルにいいました。
静まりかえったなかで、ペテルの声がひびきました。
「ラ…ラ…ラバ……ラ…ラ…ラバ……」
すると裁判官がいいました。
「これで真実が明らかになりました。ペテル、きみははっきりと〈ラバ〉ということができませんでしたね。これはきみが心にやましいことがあることのあかしです。しょうこの

品と、きみが〈ラバ〉といえなかったことにより、うそをついてとなりの男の牛をぬすもうとしたのはきみだと判断します。自分のしたことにふさわしい罰をうけなさい」

判決がいいわたされると、人びとは感心してざわめきました。ラバの頭の裁判官が、するどいまなざしと知恵で、ペテルのうそをあばき、真実を明らかにしたのです。正義がとりもどされ、真の罪人が白日の下にさらされました。

この知らせは、村内はもちろん、もっと遠い土地にもあっという間に広まりました。ラバの頭の裁判官の評判は高まり、そのさばきは伝説となりました。その名は、不正に立ちむかう勇気と真実の代名詞となりました。

それからも、ラバの頭の裁判官はその知恵と公正さを使って、常に真実と正義の大切さをうったえ続けました。〈ラバの頭の裁判官〉の話は代々語りつがれ、見かけにとらわれず、どんな状況にあっても真実を守りぬくことの大切さがみんなの心にきざまれたのでした。

ケケツ

訳——村岡直子 (Naoko Muraoka)
絵——門田千明 (Chiaki Kadota)

ロベニアの山のなかのひなびた村に、ケケツという名のゆうかんな若者が住んでいました。活発で好奇心が強く、自然とぼうけんが大好きです。毎日けわしい山を登り、森をたんけんして、その土地の野生動物と遊んでいました。

ある日、ケケツが森を歩いていると、中ががらんどうになった木の幹からうめき声が聞こえました。なんだろうと思って近づくと、中に小びとがとらわれていました。モイツァという名の、魔法が使える親切な小びとです。ケケツが自由にしてやると、モイツァは感

謝のしるしに、ケケツがぼうけんに出るときは、いつでも手伝おうと約束しました。

ケケツはうれしくなり、山の中にかくされた宝のことを聞いたことがないかとモイツァにたずねました。モイツァはほほえみ、こう答えました。

「うん、なさけ知らずのドラゴンがかくした宝についての古い伝説があるよ。勇気と知恵と広い心を見せた者だけが見つけられるんだ」

ケケツはぼうけん心をくすぐられ、宝さがしに行くことにしました。

そして、旅のとちゅうで、ペフタという女の子と出会いました。欲ばりで意地悪なペフタは、宝の話を聞くと横取りしてやろうとたくらみ、いっしょに行きたいといいだしました。モイツァは気をつけるようにといいましたが、ケケツは承知しました。旅をしながら、正直で広い心を持つことの大切さをペフタに教えられると思ったからです。

山の上へ上へと登っていく間に、ふたりはつぎつぎと困難にみまわれました。言葉を話す動物が助けを求めてくると、やさしい心を持つケケツはまよわず救いましたが、冷たくて自分勝手なペフタは手をかしませんでした。

とうとう、ケケツとペフタはドラゴンのねぐらにたどりつきました。ドラゴンは、ふたりを飲みこもうと口を開け、するどい歯をむきだしにしました。ゆうかんにもケケツはドラゴンに近づきました。それは戦うためではなくこう話しかけるためでした。

「ドラゴンさん、あなたが富と権力を求める気持ちはわかります。でもほんとうの宝とは、富を分かちあい、他の人を守ることができる人の心にあるのですよ」

ケケツの言葉に胸を打たれたドラゴンは、自分のわがままなふるまいをふりかえりはじめました。そしてよこしまな心を捨てて、ケケツと同じように、やさしさと心の広さを世界に広めたいと思うようになりました。そこでとうとうドラゴンはふたりを、宝のしまってある秘密のどうくつに案内しました。

どうくつの中に入ると、ケケツとペフタは宝を見て喜びました。ケケツはみんなで分けあえると思ったからですが、ペフタは全部ひとりじめするつもりでした。そのときモイツァがあらわれて、魔法をかけました。すると、悪いことをたくらんだ罰として、ペフタは消えてしまいました。

宝のほんとうの値打ちがわかっているケケツは、村のため、必要としている人たちのためにこの宝を使おうと決めました。こうして学校や病院を建て、貧しい家庭を助けました。心の広さとぼうけん心で、ケケツはみんなから愛される英雄となったのです。

おそれ知らずのフアン

訳——小机菜穂 (Naho Kozukue)
絵——浦上和久 (Kazuhisa Uragami)

むかしむかし、スペインのある村にフアンという若者(わかもの)がおりました。フアンは思いやりがあり、いつも進んでみんなを助けましたが、ただひとつ、勇気がないという欠点がありました。そのため、「おそれ知らずのフアン」と、わざと反対の意味のあだなをつけられ、みんなからよくからかわれていました。

フアンは、そう呼ばれるのがいやでしたが、自分の性格(せいかく)はどうにもなりません。

そんなある日、昼ごはんを食べに家へ帰ろうとしているとき、王さまの使いが大きな声

でこう告げるのを聞きました。

「王さまのおふれだ。おひめさまがけっこんをお望みだ。ついては、この国でいちばんゆうかんな者にめとらせる」

フアンはおひめさまのことが大すきでした。結ばれるわけがないとわかっていましたが、あきらめきれません。そこで、自分に足りない勇気を求めて旅に出ようと決心しました。

旅に出てまもなく、フアンはひとりのおじいさんに出会いました。おじいさんは、

「勇気を見つけるには、まずおそれに打ちかつことじゃ」と、助言をあたえてくれました。

フアンはその言葉を胸に、旅を続けました。

ある日、フアンは自分を試そうと、みんなからおそれられている暗い森に足をふみいれました。高くそびえる木々の間をぬけていくと、かげから不気味な声が聞こえてきました。

「わたしのなわばりに入りこむのは何者だ？」

「ぼくはおそれ知らずのフアンだ！　勇気を示すためにここへ来た！」と、フアンはこわさをかくして答えました。

すると、意地の悪いほほえみをうかべた老魔術師があらわれました。

「勇気だと？　おまえがどんなにゆうかんか、見てやろう！」

老魔術師が呪文を唱えると、巨大なヘビが現れました。フアンは、ふるえながらも剣をかまえ、「いつでもかかってこい！」と、しっかりとした声でいいました。

「ゆうかんなところを、見せてみろ！」といわんばかりに、ヘビはおどすようにシューッ

と音をたてます。

フアンは剣をしっかりとにぎり、うけてたちました。そして、勇ましく戦ってヘビをたおし、老魔術師に勇気を示しました。

またあるとき、フアンはふしぎな塔の前にやってきました。どうしたら中に入れるだろうと考えていると、その塔にある、たったひとつの窓から女の人の声がしました。

「ああ、どうか助けて！　中に閉じこめられているの！」

フアンが顔を上げると、塔の窓から若いむすめが顔をのぞかせていました。

「おじょうさん、安心してください！　ぼくが助けます！」フアンは自信を持っていいました。

あたりをよく調べると、塔の北側にさびたはしごがかかっていました。高いところはこわかったのですが、フアンはこわさに打ち勝ち、ギシギシきしむはしごをしんちょうにのぼりました。そして、そのふしぎな塔にあるたったひとつの窓から、中に入りました。

「来てくれたのね！」むすめはほっとしてため息をつき、「なんとお礼をいえばいいのかしら。とてもゆうかんな人だわ」と、喜びました。

「ぼくはあたりまえのことをしただけです。あなたをすくいだし、家族のもとへ返すために来たのです」フアンはほほえんでいいました。

さらにそのあともいくつもの試練をのりこえて、フアンはついにふるさとの村にもどりました。

村では、王さまがちょうど、おひめさまにふさわしい夫を見つけるために、競技会を開こうとしているところでした。馬に乗って戦い、勝った者が、おひめさまとけっこんできるのです。

そこで、旅を通してたくましくなったフアンは、競技会に出場してみごと勝利をおさめました。国じゅうでもっともゆうかんなことを証明してみせたのです。

競技会で勝ち、おひめさまの心を射止めたおそれ知らずのフアンをむかえて、城では盛大に祝いが開かれました。王さまとおきさきさまは、王国じゅうから貴族や役人たちをまねきました。星空のもと、鳴りひびく音楽と喜びの声に包まれて、フアンとおひめさまはいっしょにおどりました。

その日からフアンは「勇者フアン」として知られるようになり、人びとはフアンのゆうかんさをみならうようになりました。

婚礼のあとも、フアンは王国をよりよくしようと一生けんめい働きました。公平で、だれひとりとして力でねじふせたり、苦しめたりすることはありませんでした。

フアンとおひめさまは、末長く幸せに暮らしました。ふたりの子どもたちは両親の愛と広い心に包まれて育ちました。フアンは、思いやりがあり、たよりがいのある父親となり、大切なのは、勇気を持ち、まっすぐな心を忘れず、みんなにやさしくすることだと、子どもたちに教えました。

フアンは成功をおさめ幸運にもめぐまれても、けっしておごりたかぶることがありませ

んでした。かざらない人がらで、みんなによりそい、こまっている人たちを助けました。

こうしてフアンは伝説にのこる人物になりました。ゆうかんで思いやりのあるフアンの物語は村から村へと伝わり、若者（わかもの）たちはこわい気持ちに負けず、夢（ゆめ）を追い求めるようになったのです。

カレヴィポエグ

訳——小机菜穂 (Naho Kozukue)
絵——網中いづる (Izuru Aminaka)

むかし、緑豊(ゆた)かで美しいエストニアに、カレヴという王さまがおりました。王さまはおきさきさまと幸せに暮らし、国の民を大切にし、たいそう子どもを望んでいました。やがてその願いがかない、カレヴィポエグが生まれました。

カレヴィポエグは幼(おさな)いころから特別でした。強くゆうかんで、みんなにかわいがられました。さらに、大きくなると、みんなを助け国を守るために、自分の力を使うようになりました。

あるときエストニアは、ヴァナパガンという、おそろしい石のかいぶつにおそわれました。かいぶつは家をこわし、食べものをぬすみ、やりたいほうだいあばれまくっていました。

カレヴィポエグは、今こそヴァナパガンを止め、愛する祖国の自由を守るときだと勇気をふるいおこして、戦いへとのりだしました。

カレヴィポエグが向きあうと、ヴァナパガンはわれんばかりの声でいいました。

「おれさまにいどむ、身のほど知らずはどこのどいつだ？」

「ぼくはカレヴ王のむすこ、カレヴィポエグだ。エストニアを守るためにここへ来た」と、カレヴィポエグはどうどうと名のりをあげました。

ヴァナパガンは笑いとばしました。

「ほう、そんなちっぽけな体でおれをたおせると思っているのか？　おまえなんぞ、ハエみたいにふきとばしてやる！」

「ぼくの力を見るがいい。おまえよりも手強(てごわ)いやつらをみんなたおしてきた」

戦いがはじまり、ふたりははげしくぶつかりあいました。カレヴィポエグが強くなぐりつけましたが、ヴァナパガンはこらえます。戦いながら、カレヴィポエグはいいはなちました。

「みんなをこわがらせるのをやめるまであきらめないぞ！　ぼくらは安心して幸せに暮(く)らしたいんだ！」

ヴァナパガンはいきりたち、いいかえしました。
「止められるものなら止めてみろ！　おれは無敵だ！」
カレヴィポエグは、自信をもって戦い続けます。
「大切な人たちを守ろうとする者に、たおせない敵はいない。エストニアはぼくの国だ。ぼくは全力で国の民を守る」
カレヴィポエグは、ヴァナパガンの弱点を見つけると力をこめてぶつかり、とどめをさしました。ヴァナパガンはくずれおち、こうさんしました。
カレヴィポエグはヴァナパガンにむかっていいました。
「わかったか、ヴァナパガン。強い気持ちと勇気があれば、どんな強い相手にも負けやしないんだ。エストニアはおまえから自由になって、国の民は平和に暮らすだろう！」
みんなは喜んでカレヴィポエグをむかえ、守ってくれたことを感謝しました。カレヴィポエグはみんなに愛され、尊敬される英雄になりました。そして愛する国を守るため、それからも新しいぼうけんにたちむかっていきました。

野生の白鳥

訳——小机菜穂 (Naho Kozukue)
絵——寺澤智恵子 (Chieko Terasawa)

フィンランドの遠い森に、むかし、エーヴァというおひめさまがいました。ある日、エーヴァが湖のほとりを歩いていると、金色にかがやく一本の羽を頭につけた、野生の白鳥がいました。あまりに美しいので、おどろかせないよう注意しながら、エーヴァは近づいていきました。

白鳥はエーヴァのほうをふりむくと、やさしい人間の声で話しかけました。自分はほんとうはローエングリンという名の王子だが、悪い魔女に白鳥に変えられてしまったのだ、その魔法をとくたったひとつの方法は、清らかで美しい心を持つだれかが、自分に愛をち

かうことだ、というのです。

エーヴァは、白鳥の王子のことがかわいそうでたまらなくなり、王子を愛し、人間のすがたにもどす手だすけをすると約束しました。白鳥は、くちばしでエーヴァをくわえると、白鳥と魔法の生きものたちが暮らす秘密の国へ連れていきました。

白鳥の国はとても美しい場所で、花さく野原や銀色の葉をつけた木立ちがありました。太陽の光に照らされた白鳥たちが、ゆうがにおどり、美しい歌声であたりを包んでいます。エーヴァはすぐにあたたかくむかえいれられました。エーヴァが王子をほんとうに愛していて、清らかな心を持っているのがわかったからです。

ところが、白鳥の国には王子に呪いをかけた魔女もかくれていました。よこしまな魔女は、エーヴァと王子が心から愛しあっているのに気づくと、あらゆることをしてじゃまをしようとしました。エーヴァをまどわそうと、まぼろしまで作りだしたのです。でもエーヴァの王子への愛は強く、どんな試練にも負けませんでした。

あるあらしの日、エーヴァは王子を見失い、暗くておそろしい森に閉じこめられてしまいました。エーヴァの前に魔女があらわれ、意地の悪いほほえみをうかべていいました。

「エーヴァよ、おとぎ話を信じるなんてむじゃきなことだね。おまえの愛する人は一生白鳥のままだ。それにおまえはこの暗い森から、永遠に出られないよ！」

けれどもエーヴァは、魔女がうそをついていると見やぶり、ひるむことなくいいかえしました。

「まことの愛は強いのです。あなたが何をしようと、わたしはローエングリン王子のおそばにいます」

魔女は腹を立て、エーヴァにつかみかかろうとしました。ところが、そのとたん、白鳥の国に、目のくらむような光がさしこみました。すると、とうとう魔法がとけて、王子は人間のすがたにもどりました。

ローエングリンは自信にみちた声で、力強く魔女にいいました。

「おまえが何をたくらもうと、ぼくたちを引きはなせはしない。エーヴァのひたむきな愛がぼくを自由にした。ぼくたちは永遠に結ばれたのだ」

魔女は清らかな愛のまえに力を失い、空中に消えていきました。

白鳥の国でローエングリンとエーヴァはけっこんし、末長く幸せに暮らしました。ふたりのけっこんは、白鳥の国にも人間の国にも、平和と豊かさをもたらしました。

エーヴァの愛と勇気が悪をやぶり、どちらの世界も幸せを取りもどしたのでした。

シンデレラ

訳―小机菜穂 (Naho Kozukue)
絵―網中いづる (Izuru Aminaka)

むかしむかし、遠い王国に、シンデレラという心やさしいむすめがおりました。シンデレラは両親とともにつつましく暮らしていましたが、悲しいことに母親は若くして死んでしまいました。父親は悲しみにくれ、むすめがふたりいる、夫に先立たれた女性と再婚しました。ところが、意地の悪いまま母と姉たちは、美しく上品なシンデレラをねたんでいました。

ある日、父親は、まま母と姉たちのもとにシンデレラを残し、仕事で旅に出ました。そのときからシンデレラの人生はすっかり変わってしまいました。まま母はシンデレラに古

いくたびれた服を着せ、だんろの灰のそうじなど、きつい仕事をおしつけました。

けれども、シンデレラはそんなつらい日々にもやさしい心を持ち続け、ほほえみを忘れませんでした。とくべつな友だちもいました。たびたび窓辺にやってくる小さなハトです。シンデレラはハトといると心が安らぎ、自由と幸せを夢見ておしゃべりをしました。

ある日、シンデレラは親友のハトにこううちあけました。

「ハトさん、王子さまのぶとう会に行けたらどんなにいいでしょう。でもそんな夢はかなわないってわかっているの」

ちょうどそのころ、王さまが、あとつぎの王子のおひろめに、王国のすべてのむすめを招いて、大きなぶとう会を開くことになりました。

ぶとう会に行けると知って、シンデレラの姉たちはまいあがりました。王子さまがふたりのうちのどちらかを一目で好きになるにちがいないと、ドレスや髪の結い方について、長いことといいあらそっていました。

シンデレラもぶとう会にとても行きたかったので、姉たちといっしょに行ってもいいかとまま母にたずねました。シンデレラの美しさをねたむまま母はこう答えました。

「シンデレラ、おまえはただのめし使いじゃないか。ここに残って働くのさ」

「ぶとう会に行くことだけが夢だったんです。わたしのことをわかってくれる人が見つかるかもしれないし……」

まま母に考えなおしてもらおうと、シンデレラは必死にたのみましたがむだでした。

姉たちがぶとう会へ行くしたくをしている間、シンデレラはせまい自分の部屋にこもっていました。そのとき、金色の光がさしたかと思うと、仙女があらわれ、シンデレラにいいました。

「シンデレラ、あなたの善良さと、幸せを願う気持ちはわかっていますよ。ぶとう会に行っていらっしゃい！」

「だれ……？　あなたはだれなの？」シンデレラはびっくりしてたずねました。

「わたしはあなたを見守る仙女です。あなたの夢をかなえるためにやってきました。さあ、忘れられない夜をすごしていらっしゃい」

仙女が魔法のつえをひとふりすると、カボチャは馬車になり、シンデレラのみすぼらしい服はすてきなドレスとガラスのくつに変わりました。

出かける前に、仙女は忠告しました。

「シンデレラ、だけど覚えておきなさい。魔法は真夜中になるととけてしまいます。時計が十二時を告げる前にかならず帰ってくるのですよ」

「約束するわ。時間どおりに帰ります」

シンデレラは、すばらしい機会をあたえられたことに感謝していいました。

シンデレラは、夢のような心地で白馬がひく馬車に乗りこみ、王宮へ向かいました。

ぶとう会では、だれもがシンデレラの美しさにうっとりしました。王子はシンデレラをひと目見るなりくぎづけになりました。そしてさっそうとシンデレラに近づき、ダンスに

さそいました。

シンデレラははにかみながらもほほえんで、さそいに応じました。おどっている間、まるでむかしからおたがいを知っていたかのように、話がはずみました。シンデレラはこれまでになく幸せでしたが、とつぜん、真夜中を知らせるひとつめの鐘が鳴りました。シンデレラは仙女にいわれたことを思いだし、王子に別れを告げ、大あわてでかけだしました。けれどもそのとき、ガラスのくつを片ほう落としてしまいました。

王子はシンデレラを追いかけ、なみだながらにさけびました。

「お待ちください！　まだ名前もきいていないのに……」

けれども、シンデレラは走り続けました。王子はこのなぞのむすめを見つけたい一心で、ガラスのくつを手に取ると、そのくつがぴったり合うむすめとけっこんしようと心にちかいました。

シンデレラが家に着くと、すぐに馬車はカボチャになり、ドレスもみすぼらしい服に変わりました。そしてガラスのくつは消えてしまい、シンデレラはめし使いの生活にもどりました。

そうこうするうちに、王子がガラスのくつがぴったり合うむすめとけっこんするという知らせが、王国じゅうにひろまりました。

ガラスのくつを持って、王さまの使いが城や家々をたずね歩きました。しかし、くつの合うむすめはひとりもいません。足が大きすぎたり小さすぎたりするのです。

そんなある日、シンデレラの住む家にも使いが来ました。姉たちは競ってくつをはこうとしましたが、足が大きすぎて入りません。ふたりはがっかりして、大声でなげきはじめました。その声におどろいて、シンデレラがとびらのかげから顔をのぞかせると、王さまの使いがシンデレラに試してみるよう声をかけました。姉たちはばかにして、シンデレラを追いはらおうとしましたが、王さまの使いはゆずりません。そこでシンデレラがはくと……、くつはシンデレラの愛らしい足にぴったりと合ったではありませんか。みんなはおどろき、まま母と姉たちはいかりくるいました。

次の日、王子みずから、ガラスのくつを持ってシンデレラの家にやってきました。まま母と姉たちは、なんとかじゃまをしようとしました。けれども、仙女がふたたびあらわれ、シンデレラにガラスのくつを手わたしました。

シンデレラは息をつめていいました。

「お願い……、どうか願いがかないますように……」

そしてガラスのくつに足を入れると、ぴったり合いました。愛する人を探しあてて王子は喜びました。そして、ひざまずき、感動にふるえる声でいいました。

「シンデレラ、いとしいシンデレラ。ぼくとけっこんしてくれますか？」

シンデレラは感きわまって、王子の腕の中に飛びこみました。

「ああ、王子さま……、はい、喜んで！」

ふたりは喜びでいっぱいになってだきあうと、いっしょに王宮へ行き、いつまでも幸せ

に暮らしました。

こうして、心のやさしいシンデレラは、苦難をのりこえ、ずっと望んでいた愛と幸せを手に入れました。

うさぎとかめ

訳——小机菜穂 (Naho Kozukue)
絵——祖敷大輔 (Daisuke Soshiki)

むかしむかし、古代ギリシャのとある森に、レオニダスという、とても足のはやい、うぬぼれやのうさぎがおりました。レオニダスは、森の動物たちに自分の足のはやさをしじゅうじまんばかりしています。

ある日、レオニダスが森を散歩していると、テオドラというかしこいかめにであいました。テオドラは、足はおそいけれども、物知りで頭がよいことで知られていました。

テオドラは、ひっきりなしにじまん話ばかりするレオニダスにうんざりして、ちょっと

こらしめてやろうと思いたちました。そこでレオニダスに近づき、小声でこういいました。
「こんにちは、レオニダス。あなたは走るのがたいそうはやいそうね。競走したらだれにも負けないでしょう」
レオニダスは、にやりとすると、胸をはって答えました。
「もちろんさ！　ぼくみたいにはやく走れるやつはどこにもいないさ。この森でいちばんはやいのは、ぼくだからね！」
思ったとおりの答えにテオドラはほほえみ、勝負をもちかけました。
「では、勝負しましょう。あなたのはやさを見せてもらおうじゃないの。あしたの朝、森の動物たちみんなの前で、わたしと競走しましょう。あなたが勝てば、あなたのすばらしさを認めるわ。けれどもし負けたら、態度を改めて、じまんばかりするのをやめること」
レオニダスは、のろまなかめなどかんたんに負かせるだろうと自信たっぷりです。見くだすようににやにやして、すぐさま受けてたちました。
次の日、森の動物たちはこの大勝負にたちあおうと集まりました。
出発地点に線が引かれると、森の動物たちが見守るなか、テオドラは意を決して位置につきました。自信たっぷりのレオニダスはとなりに並び、はやく走りたくてうずうずしています。
「レオニダス、準備はいい？」テオドラがおっとりとたずねました。
「もちろん！　どうせぼくが勝つに決まっているさ！」レオニダスは目をぎらつかせて、

えらそうに答えます。

「位置について、用意……どん！」審判として呼ばれた穴うさぎの号令で、競走がはじまりました。

レオニダスはテオドラをおきざりにして、ものすごいはやさで遠ざかります。うしろをふりかえると、ゆったりした足取りながらも、止まることなく進むテオドラが見えました。しばらくすると、レオニダスは自分が勝ったものと思い、ひと休みしようと木かげで横になりました。その間にも、テオドラはつかれもなんのその、休まず進み続けます。

テオドラが通りかかると、レオニダスはばかにするように笑い、声をかけました。

「よう、テオドラ、なんだって歩いているんだい？　ぼくに勝てるわけがないのに」

テオドラは足を止めることなく、おちついてこう答えました。

「思いあがらずに、根気よく歩き続ければ、はやさにも勝るものなのですよ、レオニダス」

レオニダスは笑いとばして、ひるねを続けました。自分の足なら、あっという間に追いぬけるに決まっています。ところが、とつぜん、森の動物たちの歓声が聞こえました。拍手や声がどんどん大きくなります。

耳をうたがいながらレオニダスは走りだしましたが、おそすぎました。テオドラが競走に勝ったのです。

負けたレオニダスはしょんぼりして、はずかしそうにテオドラにいいました。

「テオドラ、よくわかったよ。きみのねばり強さと決意は、ぼくのはやさよりも、ずっと

すばらしい。ゆるしておくれ。これからはえらそうにじまんばかりしていないで、みんなと仲よくするよ」

テオドラはやさしく答えました。

「はやさはときに役に立つけれど、うぬぼれることなく、こつこつ努力を続けることは、いつだってたいせつよ。そのことをけっして忘れないで」

森の動物たちはテオドラに拍手(はくしゅ)をおくり、勝利をお祝(いわ)いしました。それからというもの、レオニダスはえらぶるのをやめ、ほかの森の動物たちをもっと大事にするようになりました。

おひめさまと羊飼い

訳——小机菜穂 (Naho Kozukue)
絵——牧野千穂 (Chiho Makino)

緑の谷とそびえ立つ山々にはさまれたエルドリア王国に、マルコという羊飼いの若者がおりました。マルコが羊を連れて歩くと、美しい声があたりにひびきわたりました。心やさしく働き者のマルコは村のみんなに愛されていました。

ある日、いつものように羊の群れを連れて出かけたマルコは、これまで来たことのない、光のあふれる場所にたどりつき、目をうばわれました。木々の間から、目をうたがうほど美しいすがたが見えたのです。それは、王さまのむすめ、エレナひめでした。城のバルコ

ニーにおでましになるすがたを、いつも遠くからあおいでいたエレナひめが、今、マルコのすぐそばで、自然の中をそぞろ歩きながら物思いにふけっているのです。

エレナひめと目が合うと、マルコのからだは急に熱くなり、心臓が高鳴りました。一目で恋におちたのです。はじめての気持ちにとまどいつつも、マルコはエレナひめから目がはなせません。どきどきしながら勇気をだして近づき、ふるえる声でいいました。

「エレナひめ、ぼくは、あなたのまなざしと美しさに心をうばわれました。あなたのおそばにいたいのです。けっこんを許してくれるよう、王さまにお願いさせてください」

エレナひめは、まっすぐに熱い思いを告げたマルコにおどろき、やさしくほほえみ、こう答えました。

「羊飼いさん、あなたの気持ちはうれしく思います。でもわたしは王のむすめ、身分がちがいます。父はけっこんを許さないでしょう。でも、あなたのゆうかんな心はすばらしい。どうか勇気と何事もやりとげる力を見せてください。そうしたら、わたしたちの愛の夢をかなえる方法を見つけられるでしょう」

マルコはやってみせようと意気ごんで、村の長老に助言を求めました。長老は、マルコの話を聞くとこういいました。

「マルコ、勇気を示したいのなら、三つの難しい試練を乗りこえるのだ」

最初の試練は、魔女が森にかけた呪いをとくことでした。マルコはうっそうとした森にずんずん入っていきました。何日も歩いたあと、ひとりの老人と出会いました。老人は、

「この剣は知恵とともに使いなさい。清らかな心だけがのろいをやぶるだろう」といって、マルコに魔法の剣をさずけてくれました。

マルコは、魔法使いがつくりだした生きものをやっつけ、なぞをとき、ついに魔女をたおし、まがまがしいのろいから森をときはなちました。

二つ目の試練は、山の王の宝物をみつけることでした。マルコはけわしい山道をのぼり、谷あいの道をぬけ、山のてっぺんをめざして進みました。何日かすると、二つの岩の間にかくれたどうくつを見つけました。岩の間はせまくて中に入れそうにありません。しかし、木の枝をつたっていくと中におりられ、ついに山の王の宝物が見つかりました。どうくつの中にはひとすじの光しかさしこんでいませんでしたが、その光が宝石や金貨や銀貨にあたって、あたりをうっすら照らしだしていました。そこには宝石や黄金のかんむり、宝石がちりばめられた伝説の剣もありました。マルコは、エレナひめと王さまに、自分の心と力とつつしみ深さを示すのに必要なものだけを手にとりました。

三つ目の試練はいちばん危険なものでした。マルコは、ある国の若い王子をさらった悪い巨人にいどみました。巨人のどうくつにしのびこむと、岩のさけめに身をひそめ、ゆうかんに王子を助けだし、長い間その国を苦しめてきた巨人をみごとたおしました。

こうしてマルコは、試練で手に入れた宝物をたずさえ、王さまとエレナひめに会うために城に向かいました。

「王さま、ぼくは試練をのりこえ、力と勇気を証明しました。どうか、エレナひめとけっ

こんさせてください。ぼくの愛はほんものです」マルコはいいました。
　王さまは、羊飼いのマルコの勇気と、人のためにつくすまっすぐな心に感心し、エレナひめにたずねました。
「エレナよ、この羊飼いの若者をどう思うかね？」
　マルコの身を案じながら待ちつづけてきたエレナひめは、ほほえんで答えました。
「お父さま、マルコはゆうかんに戦い、試練をりっぱに乗りこえました。わたしの心はマルコのものです」
「よかろう。マルコ、おまえは勇ましくかしこい、そのうえ忠実だ。むすめとのけっこんを許そう」
　王さまは立ちあがり、マルコの右肩に剣を置いていいました。
「ひざまずけ。おまえに皇太子の位をあたえる。そして将来、この国の王となるがいい」
　こうして、マルコとエレナひめは、永遠の愛で結ばれけっこんしました。マルコは、王国のみんなから愛される、かしこく公平な王になりました。

レプラコーン

訳——小机菜穂 (Naho Kozukue)
絵——ヒグチユウコ (Yuko Higuchi)

むかしむかし、美しい国アイルランドに、レプラコーンという小びとがおりました。レプラコーンはくつを作るのが上手で、お金持ちで有名でした。黄金のなべに宝物を入れて、にじのふもとにかくしているのでした。

レプラコーンはかしこくていたずら好きでした。レプラコーンをつかまえたら、宝のありかを教えてもらえるといわれていましたが、そうかんたんにはつかまりません。レプラコーンはすばしこいうえに、頭がいいのです。

おおぜいの人がレプラコーンの宝を手にいれようとしましたが、みんな失敗に終わりま

した。ほんのいっしゅん目をはなすと、アイルランドのうすもやの中に消えてしまうのでした。

レプラコーンはいたずら好きでしたが、広く愛されていました。アイルランドの伝統や文化を守っていたからです。みどり色のとんがりぼうし、みどり色の上着、ぴかぴかの黒いくつでおなじみのレプラコーンは、アイルランドの歴史を説明するのにかかせない存在です。いまでも多くの子どもたちが、レプラコーンのために、牛乳のはいったコップを窓辺におきます。

レプラコーンは妖精のくつ職人でしたが、くつを作っていないときは、欲ばりな人たちをからかったり、どろぼうをつかまえるわなをしかけたり、いたずらばかりしていました。

むかし、緑の丘ときらめく小川にはさまれたアイルランドの小さな村に、シェイマスという年老いたかじ職人がおりました。しらがまじりのひげをたくわえた、腕のよい職人で、かしこく物知りだったので、みんなから尊敬されていました。シェイマスの仕事場は、魔法のような場所でした。とびちる火花に照らされて、鉄がみごとな作品にうまれかわります。

ある日、シェイマスがせっせと鉄を打っていると、裏庭から耳なれない声が聞こえてきました。なんだろうと思ってつちを置き、ゆっくり木のとびらを開けると、遠くに小さな人かげが見えました。人里はなれたところに住むといわれる伝説の小びと、レプラコーン

レプラコーン

でした。先のとがったみどり色のぼうしをかぶり、みどり色の上着を着ています。ひざの下まであるズボンもみどり色。それに、銀の金具がついた黒いくつをはいていました。レプラコーンは、あちらこちら、いそがしくとびまわっています。何かこまっているようです。シェイマスは用心しながらふしぎな小びとに近づき、やさしく声をかけました。

「やぁ、おはよう。かじ屋のシェイマスじゃが、どうかしたのかい？」

レプラコーンはとつぜん人が現れたのでおどろいて、ひっくりかえってしまいました。明るい色の目がきらりとかがやき、小さなくちびるがすばやく動きました。

「ああ、親切なかじ屋さん！　黄金のなべをなくしてしまったんだ！　おれの宝物なのに。あれがないと魔法も使えなけりゃ、金貨も作れないんだよ！」

シェイマスは気の毒になって、なくした宝をいっしょに探すことにしました。ふたりは花畑をぬけ、さわやかな小川をこえ、レプラコーンが森の中に残した足あとをたどっていきました。

ずいぶん長いこと歩き、いくつものにじのふもとを探しました。そして、ついにふたりは、りっぱなナラの木の枝の間にかくれた、古い丸太のところにたどりつきました。レプラコーンが注意深くかくしたかがやく黄金のなべは、そこにありました。

レプラコーンは喜んで、軽やかに足を動かして、ひょいひょいおどりはじめました。

「ああ、親切なかじ屋さんがおれの宝物を取りもどしてくれた！　あんたはほんとうの友だちだ。お礼をさせておくれ」

シェイマスはにっこりしていいました。

「小びとさん、わしは何もいらんよ。けれど、ひとつ大切なたのみがある。これからおまえさんが善良で親切な人たちに出会ったら、その人たちの願いをどうかかなえてやっておくれ」

レプラコーンはシェイマスのおおらかさに感じいり、かしこまってうなずきました。

「そうするとも、親切なかじ屋さん。親切で心の広い人の願いをきっとかなえると約束する。あんたの望みは聞きいれられた」

その日から、レプラコーンとシェイマスは強いきずなで結ばれ、レプラコーンは約束を守りました。

ふたりの話はあっという間に村じゅうに広まりました。レプラコーンに願いをかなえてもらおうと、人びとはきそって人にやさしくしはじめました。時がたつにつれて、人びとは、もっとやさしく親切になり、こまっている人を助けるようになりました。やさしさの輪が広がり、レプラコーンはときおり、美しい心を持つ人の願いをかなえてあげました。

ピノッキオ

訳——小机菜穂 (Naho Kozukue)
絵——寺澤智恵子 (Chieko Terasawa)

むかしむかし、大工のサクランボ親方の工房に、ひょっこりあらわれた木のきれはしがありました。その木のきれはしがとつぜんしゃべりはじめ、サクランボ親方をからかいだしたものですから、親方はびっくりぎょうてん。きれはしを持っていたくないので、大工の友だちのジェッペットにあげました。ジェッペットは、その木であやつり人形を作り、ピノッキオと名づけました。

生まれたばかりのピノッキオは、すぐにわんぱくぶりをみせて、家からぬけだしました。ジェッペットは走りだしたピノッキオを追いかけるとちゅうで警官につかまってしまいま

した。きみょうなあやつり人形をほんとうのむすこのように心配するのはどうかしていると思われたのです。

こうして、波乱万丈の物語がはじまります。

ピノッキオは家にもどると、人間の言葉を話すコオロギを見つけました。コオロギは、ぎょうぎが悪くていうことをきかないピノッキオをしかりました。でもお説教はこりごりと、ピノッキオはまた家をとびだしました。おなかはぺこぺこであいにく天気も悪かったので、ピノッキオはとうとう火のそばでねむりこんでしまいました。そして目をさましたときには、足がこげていました。次の日、すでにろうやから出ていたジェッペットは、ピノッキオにごはんを食べさせ、足を作りなおして、紙の服まで用意してやりました。その上、寒い冬だというのに、ピノッキオを学校へ行かせるために、自分の上着を売ってしまいました。ピノッキオは、ジェッペットが自分をとても愛していて、いたずらもすべて許してくれるとわかりました。

そんなある日、学校へ行くとちゅうで寄り道して、ピノッキオはあやつり人形の大劇場を見にいきました。すると、みんながピノッキオを仲間としておおさわぎでむかえたので、人形使いの火食い親方はおもしろくありません。夜になると、親方はピノッキオを燃やして、晩ごはんを作る火をおこそうとしました。けれども、かわいそうになって思いなおし、お父さんにわたすよう、ピノッキオに金貨を五枚持たせて家に帰しました。

家に帰るとちゅうで、ピノッキオはふたりのぺてん師、ネコとキツネに出会いました。

ふたりは、きせきの原っぱに金貨を植えれば金貨がなる木がはえてくる、とピノッキオに信じこませました。赤エビ食堂で晩ごはんを食べたあと、ピノッキオはきせきの原っぱへ向かいました。けれども、殺し屋になりすましたネコとキツネに、金貨をぬすまれそうになりました。ピノッキオは金貨を口の中にかくし、助けをもとめて「るり色の髪の妖精」と呼ばれる少女の家をめざしてにげました。けれども、やはりネコとキツネにつかまってしまいました。ところが金貨が見つからないので、ネコとキツネに大きなカシの木につるされました。

るり色の髪の妖精は、ピノッキオの運命をかわいそうに思い、家へつれてかえって看病しました。ピノッキオは、妖精にこれまでの話をしましたが、たくさんのうそをつきました。するとうそをつくたびに、鼻が少しずつのびていきました。それでもるり色の髪の妖精は、ピノッキオが、ほんとうはジェッペットのもとに帰りたがっていることを見ぬきました。

ピノッキオは通りへ出ると、またネコとキツネに会いました。きせきの原っぱに金貨を植えればもっと増えるといわれ、ピノッキオはついていってしまいました。

だまされたピノッキオは、金貨を失いました。そのうえ、判事に正しいさばきをお願いしたのに信じてもらえず、どろぼうのかわりにつかまってしまいました。

四か月後、皇帝は、大きな戦いに勝ったお祝いに、悪者たちの罪をゆるし、ろうやから出すことにしました。そこで、ピノッキオもろうやの外に出ることができましたが、まだ

正しい道を歩むことができません。ピノッキオはまた問題をおこしました。ブドウ畑からブドウをぬすもうして、つかまってしまったのです。ブドウ園の主人は罰として、ピノッキオを番犬のかわりに働かせ、はずかしい思いをさせました。でも、どろぼうを追いはらうてがらをたてたので、しばらくしてピノッキオは自由にしてもらえました。

そうこうするうちに、ジェッペットは、いなくなったピノッキオをそこらじゅうでさがしはじめました。ある日、ピノッキオがさまよい歩いていると、大きなハトにであいました。ハトは、ジェッペットがなんとしてもピノッキオを見つけようと、海で探すための船まで作ったと知らせました。ピノッキオは、それを聞いて胸がいっぱいになり、海に飛びこみました。すると、いっぴきの魚が悲しげに、ジェッペットはクジラにのみこまれてしまった、と告げにきました。

ピノッキオは波に運ばれて海岸にうちあげられ、はたらきバチの国に着きました。そこでピノッキオは仲間とけんかして、またろうやに入れられそうになりました。そこで、ピノッキオはにげようと、ふたたび海にとびこみましたが、おそろしい漁師のあみにかかってしまいました。そしてピノッキオはほかの魚といっしょに、フライパンでフライにされそうになりました。ですが、あやういところで、犬のアリドロに助けられました。

ピノッキオはまたしても妖精のもとにもどると、すっかりききわけがよくなりました。それに気づいた妖精は、ぎょうぎよく、学校でもよい成績をおさめるようになったピノッキオを、じきに人間の子どもにしてやると約束しました。でもピノッキオはあまいさそい

にさからえませんでした。もっともなまけものの同級生ルチニョーロのさそいにのって、おもちゃの国へついていってしまいます。そこは本もなければ先生もいない、子どもたちが朝から晩まで楽しく遊んでいる場所でした。でも楽しいことは長くは続きません。ピノッキオとルチニョーロはすぐに二ひきのロバにすがたをかえられ、売りとばされてしまいました。

ピノッキオはサーカスの座長に買われましたが、公演の最中にけがをしたので、海につきおとされて殺されそうになります。そこでピノッキオは、おそろしいクジラにのみこまれてしまいました。するとクジラのおなかの中で、遠くにぼんやりと光が見えました。近づいていくと、なんとうれしいことでしょう、そこにはピノッキオのお父さん、ジェッペットがいたではありませんか。クジラは口を開けたままねむっていたので、すきを見てふたりはにげだしました。マグロたちの助けをかりて、ふたりは岸にたどりつきました。

家にもどると、ピノッキオはこれまでのことをくやんで、病気のジェッペットを助けて、いっしょうけんめい働くようになりました。そして、るり色の髪の妖精は、ピノッキオが心をいれかえ、成長したのをみとめ、ついにピノッキオを人間の子どもにかえてくれました。「いい子になれてうれしいよ！」と、ピノッキオは大きな声でいいました。

クマより強い英雄

訳——小机菜穂 (Naho Kozukue)
絵——祖敷大輔 (Daisuke Soshiki)

むかし、ある谷に、もうすぐ赤ちゃんが生まれる若い夫婦がおりました。ふたりは働きながらつつましく幸せに暮らしていました。夜はたき火を囲んでかたらい、バイオリンをひいて楽しみ、森のはずれの小さな家で、おだやかな日々を送っていました。

妻は家の仕事をして、夫は生まれてくる子をやしなうために、一生けんめい畑で働きました。ところが、夫がとつぜん死んで、幸せはとぎれてしまいました。妻は悲しみにくれましたが、おなかの子の将来を考えなければなりません。いよいよ赤ちゃんが生まれそ

うになると、妻は百年をこえる古い木々の森へ行きました。そして、大きなカラマツの下に横たわり、そこでラーチュプレーシスをうみました。

お産のあいだ、妻はまばゆい光に包まれました。むすこのラーチュプレーシスは生まれてすぐに、人なみはずれた力を示しました。赤んぼうのころから、子守は年老いたクマでした。やがてこのクマは、ラーチュプレーシスの友だちとなり、さらには先生となり、どうやって勇気を持ち、危険を乗りきるかを教えました。そして、自分だけではなく、まわりの動物や植物にとっても、何がいちばんよく、何が正しいかを見きわめるようみちびきました。それは、森で生きていくために必要な考え方であり、能力でした。

おとなになると、クマから学んだ教えは、悪しきをくじき弱きを助けるために、欠かせない力となりました。すべての人びとの幸せが、ラーチュプレーシスの願いでした。

ある日、ラーチュプレーシスはついに、ラトビアでもっともおそれられ、にくまれている悪者、黒騎士と対決しました。残酷な黒騎士は、町や村に恐怖をばらまき、ラトビアの人びとを自分の思いどおりにしようと、悪事のかぎりをつくしていたのです。

ラーチュプレーシスは、そんな黒騎士を勇気ととてつもない力でたおし、恐怖の種をとりのぞき、人びとに自信をとりもどさせました。こうして、ラーチュプレーシスは、ラトビアの国民的な英雄になったのです。さげすまれたりひどいめにあわされたりすることがなくなり、人びとはふたたび自由に外に出て集い、畑や作業場で安心して働けるようになりました。

傍若無人の黒騎士をたおしてから、すべてはよいほうにむかいました。それでもラーチュプレーシスは、まだ国のためにできることがあると考え、かくされた宝物を探すことにしました。それは、国全体の運命をかえるほど莫大な宝物だとうわさされていました。

こうしてラーチュプレーシスは旅に出ました。とちゅうには、試練がつぎつぎと待ちうけていました。かいぶつやよこしまな生きものがあらわれたり、こみいったなぞ解きをせまられたり、もうだめかというような場面もありました。それでも、ラーチュプレーシスは強い心を持って工夫をこらして立ちむかい、すべて乗りこえ、ついには、こまっている人たちや国のみんなのために望んでいた宝物を探しあてました。

ある日、森を歩いているとき、ラーチュプレーシスは、美しい若いむすめを見かけました。それはライマひめでした。ふたりは長いあいだ見つめあい、それだけでおたがいが大好きになりました。

けれども、いっしょにいたいという願いは、運命にさまたげられました。めばえたばかりのふたりの愛は、いくつもの大きな試練にさらされ、ラーチュプレーシスはライマひめを守るために、数々の困難に立ちむかわなければなりませんでした。でもラーチュプレーシスはかたい意志で、魔法をかけられた迷宮、どうもうなドラゴン、あの手この手でふたりをひきはなそうとする悪党どもなど、どんなにきびしい試練ものりこえ、ライマひめと結ばれました。

ラーチュプレーシスは、外国にうばわれていたラトビアを自由にするための戦いにもい

どみ、この戦いは歴史に残るものとなりました。自分たちの手で国をおさめ、自分たちのことを自分たち自身で決めたいという、自由への強い思いを胸に、ラーチュプレーシスはラトビアの国民をひきいて勇ましく戦いました。そして大勝利をおさめ、敵やあくどい支配者に立ちむかう人びとのシンボルとなったのです。

ヘビのおきさきエグレ

訳――平野麻紗 (Asa Hirano)
絵――牧野千穂 (Chiho Makino)

むかし、美しいリトアニアの村に、エグレという若いむすめがいました。たいそう美しく、やさしい心の持ち主で、海に住むヘビの王子がエグレに恋をしました。

ある日、エグレが海辺を歩いていると、海の中からヘビの王子があらわれ、けっこんを申しこみました。

「エグレよ、わたしの願いをきいてほしい」ヘビの王子は歌うようにささやきかけました。

「どうかわたしの妻になり、海の王国でヘビのおきさきになっておくれ。豊かで幸せな暮ら

しを約束しよう」

ヘビの王子の声とその申し出に心ひかれて、エグレは答えました。

「お気にかけていただき、たいへん光栄です。でも、人間のわたしがどうやってヘビとけっこんできるというのですか」

ヘビの王子はエグレに近づいていいました。

「わたしはただのヘビではない。人にすがたを変えることもできる王子だ。共にすごすかぎり、だれよりもきみを愛し続けるだろう」

エグレはヘビの王子の言葉に心を打たれ、けっこんの申しこみを受けいれました。

「わたしは心を決めました。あなたの妻（つま）になり、海の王国へいきましょう」

ヘビの王子はエグレを海の王国へ連れていき、エグレはヘビのきさきになりました。

月日は流れ、エグレは半分人間で半分ヘビの子どもを三人産みました。幸せな毎日でしたが、エグレはふるさとが恋しくなり、ヘビの王子にこうお願いしました。

「ふるさとの家族に会いたくてたまらないのです。少しのあいだ、会いにいってはいけませんか」

ヘビの王子は不安になりましたが、とうとう承知（しょうち）しました。

「いいだろう。ただし、三日でもどると約束しておくれ。約束が守られなければ、わたしたちは二度と会えなくなるかもしれないよ」

エグレは生まれた村にもどりました。両親は大喜びでエグレをむかえました。ふるさと

の家族と楽しくすごすうちに、あっというまに時間はすぎ、エグレはヘビの王子との約束をすっかり忘れてしまいました。

ようやくもどろうと決めて、海に向かったときには、ヘビの王子のすがたも子どもたちのすがたもありませんでした。

「なんということをしてしまったのかしら。わたしは海の中の家族を永遠に失ってしまったんだわ」エグレは泣きじゃくりました。

絶望したエグレは、海のことをよく知る漁師のところへいきました。

「どうか助けてください。夫と子どもたちを探すのを手伝ってもらえませんか」エグレは必死にたのみました。

漁師は協力を約束し、ふたりはエグレの夫と子どもたちを探す旅に出ました。

危険な海をわたり、いくつもの試練を乗りこえて、とうとう海辺の小高い丘にたどりつきました。

「あそこにりっぱな松の木が！　何か手がかりがあるかもしれない」

エグレがそういって近づいてみたところ、松の木の枝にふしぎと親しみを覚えました。その木は、すがたを変えたヘビの王子と子どもたちだったのです。

「いとしいエグレ、もどってきたんだね」松の木からささやきが聞こえました。「きみの帰りがおくれて、わたしたちは木にすがたを変えねばならなくなった。だが、わたしたちの愛は変わらないよ」

エグレは松の木にかけより、夢中で抱きしめました。でも、すでに手おくれでした。ヘビの王子と子どもたちは木になってしまったのです。

「どうかお許しください！　約束を守らなかったわたしが悪いのです」エグレは涙を流しました。

けれども、いまやヘビから木となった王子はいいました。

「泣かないでおくれ。わたしも子どもたちも幸せだ。これからはずっときみのそばにいられるのだから。家族がひとつになれたんだ。わたしたちの愛は永遠だよ」

幸運なむすこのはなし

訳——平野麻紗 (Asa Hirano)
絵——浦上和久 (Kazuhisa Uragami)

むかし、ルクセンブルクのまんなかにある山と谷のあいだに、森と川に囲まれた美しい村がありました。その村に、ペーターとマリアというおひゃくしょうさんの夫婦が暮らしていました。ふたりは子どもをさずかりたいと心から願っていました。何年かすると、ようやく赤ちゃんが生まれました。たまのような男の子です。赤ちゃんが笑うと、そのたびに金が出てきました。

「ごらんよ、マリア！　この子はまさにきせきだ！　笑うたびに金が出てくるよ」

「ほんとうに、信じられないわ！　この幸運なむすこをフリッツェンと名づけましょう」

美しい村で、フリッツェンはお父さんとお母さんの愛情をたっぷりと受けて育ちました。やがて、むすこが笑うと金が出てくるというううわさは国じゅうに広まりました。

「聞いたかい？　ペーターとマリアのむすこは、笑うと金が出てくるんだと！　なんて幸運な子どもだろう！」と、村の人たちはささやきあいました。

ある日、村まつりの最中に、白い馬の引く金の馬車が村にやってきて、中央広場で止まりました。かたい笑みをうかべた冷酷な王が馬車からおりて、大声で告げました。「われには、特別な能力を持つその子どもが必要だ。みなのもの、子どもを城に連れてまいれ」

王の兵士たちはフリッツェンをとらえ、無理やり連れていこうとしました。けれどもゆうかんなフリッツェンはひるむことなく、追っ手をふりきって森へにげました。

「つかまってたまるか！　どこかに安全な場所を見つけよう」

フリッツェンは休まずに山と谷をかけぬけました。とうとう立ち止まったとき、美しい妖精が光に包まれてあらわれました。

「フリッツェン、勇気ある幸運なむすこよ、あなたを助けにきましたよ。このまま七つの星の道を進みなさい。そうすれば助かるでしょう」と、妖精は助言をあたえてくれました。

フリッツェンは妖精をじっと見て、お礼をいいました。

「ありがとう。いわれたとおりにします」

夜空にかがやく七つの星に照らされて、フリッツェンは細い道を歩いていきました。星に導かれ、うっそうとしげった森や花がさく野原をぬけていきます。三本の小川をわたっ

て、うっとりするような場所にたどりつきました。

なにかがきらきらとかがやいています。近づいてみると、それはなんと宝物でした。フリッツェンは思わず声をあげました。

「まちがいない。これは、見つけた者に幸せをもたらす魔法の宝だ」

きらめく宝石もあれば、金貨も、めずらしい品々もあります。いかにもそれは、見つけた者の望みをかなえる魔法の宝物でした。

フリッツェンはそのときわかりました。自分がずっと望んでいたのは、村の人たちが豊かで幸せになることだったのです。いまこの宝物を手にすれば、貧しい人たちを助け、国じゅうに喜びをもたらすことができます。これを利用しない手はありません。フリッツェンは宝物を村へ持ちかえり、村人たちと分けあいました。

みんながフリッツェンに感謝しました。通りや畑で見かけると、こう呼びかけました。

「みんなの英雄フリッツェン！　ほんとうにありがとう」

けれどもフリッツェンはいいました。

「暮らしをよくするために役に立ててうれしいよ。ほんとうの豊かさは、みんなと幸せを分かちあうことにこそあるんだから」

幸運なむすこフリッツェンは、ますます評判になりました。今度は、笑うと金が出てくるからではありません。村の幸せのために自分の能力を使った、心やさしく気前のいい英雄として知られるようになったのです。

ゴゾ島の巨人（きょじん）

訳―平野麻紗（Asa Hirano）
絵―寺澤智恵子（Chieko Terasawa）

ゴゾ島は手つかずの自然が美しいところです。すきとおった地中海と、岩場に囲（かこ）まれています。むかしむかし、この島に住んでいた人びとは、つつましく、働き者でした。その多くは漁師（りょうし）で、彼らの望みはただひとつ、自由になることでした。

というのも、ゴゾ島はゴルグという巨人（きょじん）に支配されていたからです。ゴルグの体はがっしりとしていて、腕（うで）はたくましく、はだは岩のようにごつごつとしています。見るもおそろしく、よこしまで、人びとをふるえあがらせていました。顔は濃（こ）いひげにおおわれ、目

は意地悪そうに光り、強大な力を示そうと、さびた重いよろいかぶとを身につけています。

ゴゾの島民たちはゴルグにおどされ、つかれはてていました。仕返しがこわいのでさからえず、ゴルグの無理な要求は増すばかりです。人びとは悲しみおそれながらも、いつかゴルグから解放される日が来るという希望を心にいだき続けていました。

そんなゴゾの島民の中に、ジョンというゆうかんな若者がいました。背は中くらいで、黒い髪は豊かで、きらきらとかがやく目が意志の強さを表しています。顔には深い傷あとがありました。かつて軍事訓練を受けたときについたものでした。

ジョンは住人たちの希望の星でした。島の人びとの尊厳をとりもどし、ゴルグの支配からのがれるために戦おうと、立ちあがったのです。あの手この手でゴルグをやっつけようと試みたあげく、とうとう命がけの決闘の機会が訪れました。

決闘は、ゴゾ島の丘、岩山、海岸にまたがる壮大なものになりました。ジョンとゴルグは、大きな岩や生い茂る木々をはさんで向きあいました。戦いは数日間におよびました。身をひそめて不意うちをかけ、海で岩やあみを投げあったり、山頂で顔をつきあわせて取っ組みあったり、剣をかわしたり。ナイフで攻撃してジョンは何度かゴルグを追いつめましたが、打ち負かすことはできません。なぐりあう音やさけび声があたりに響きわたりました。

身軽なジョンは、ゴルグの強烈な一撃をかわし、すばやく動きまわりました。まわりの地形をうまく利用し、岩から岩へと飛びうつって、そのゆうかんさを見せつけます。

ゴルグは戦いながら、怒りといらだちをつのらせてさけびました。

「勝たせてなるものか。ゴゾ島の支配者はおれさまだ。はむかうやつはつぶしてやる！」

その声はかみなりのようにとどろきました。

けれどもジョンの決心はゆらぎませんでした。

「ゴルグ、おまえはもうおしまいだ。おれはおまえから島を解放するとみんなにちかった。約束したことはかならずやりとげてみせる！」

戦いは激しくなり、緊張はますます高まりました。ジョンは正義と島民への愛情のために戦いました。一方、自分のわがままと権力しか頭にないゴルグの力は、しだいに弱まっていきました。人びとは、期待とおそれを抱きながらただただ戦いを見守りました。

とうとう、力をこめた一撃で、ゴルグはがまんできずにたおれ、ジョンが勝利をおさめました。

希望がよみがえり、ゴゾ島は喜びとお祝いの空気に包まれました。住人たちはジョンに心から感謝しました。こうしてゴゾ島はようやく自由を手にすることができたのです。

マッチ売りの少女

訳——平野麻紗 (Asa Hirano)
絵——ヒグチユウコ (Yuko Higuchi)

むかし、アンナというマッチ売りの少女がいました。アンナには、家も、寒さをしのぐ場所もありません。

今日は大みそか、冷たい風がひとけのない通りにふきつけていました。アンナはぼろぼろの服を着て、すり切れたマフラーを巻き、寒さに手をふるわせながら、マッチを売ろうとしていました。いくらかお金をかせいで、食べものを手に入れようと思ったのです。

アンナは空腹と寒さでつかれきっていましたが、消えいりそうな声で呼びかけました。

「マッチ！　マッチ！　マッチはいかがですか？」

けれども人びとは新年のお祝いのことで頭がいっぱいです。アンナには目もくれず、そそくさとかたわらを通りすぎていきました。小さなアンナはおなかをすかせ、通りの角に身を寄せて、ぐったりとすわりこみました。

「だれもマッチなんていらないのかしら……。ああ寒くてたまらない……」

アンナは一本のマッチに火をつけ、そのささやかな火であたたまろうとしました。するととつぜん、目の前に魔法の火があらわれました。近づくと、アンナはいつのまにかあたたかい部屋の中にいました。りっぱな暖炉があり、食卓にはおいしそうな料理が並んでいます。けれども、マッチの火が消えたとたん、部屋も消えてしまいました。

あまりの空腹と寒さに、アンナはもう一本マッチに火をつけました。今度は目の前に、光りかがやくみごとなクリスマスツリーがあらわれました。アンナは、美しいかざりのついた枝をうっとりとながめました。けれども、マッチの火が消えると、クリスマスツリーも消えてしまいました。

暗闇がおそろしく、寒さで感覚もなくなって、アンナは三本目のマッチに火をつけました。今度は、おいしそうなおかしをいっぱいに積んだ荷車があらわれました。アンナはおかしを手にとって、大喜びで食べはじめました。けれども、マッチの火が消えると、やはり荷車もおかしも消えてしまいました。

アンナは期待に胸をふくらませ、残りのマッチすべてに火をつけました。まばゆい光が

マッチ売りの少女

二〇一五年

アンナのまわりに広がります。今度は、ずっと前に死んだ、アンナの大好きだったおばあさんがあらわれました。おばあさんはほほえんで、アンナの手をとりました。そして、寒さも貧しさもない、あたたかで居心地のよい場所へとアンナを連れていきました。

翌朝、通りがかりの人たちが、町角で冷たくなっているアンナを見つけました。とうとうこの苦しみの世に別れを告げて、アンナの顔はおだやかでした。

銀のくつ

訳——平野麻紗 (Asa Hirano)
絵——門田千明 (Chiaki Kadota)

むかし、ポーランドの小さな村に、カーシャという美しいむすめがいました。カーシャの金髪は太陽のようにかがやき、目は星のようにきらめき、礼儀正しくやさしかったので、だれからも愛されていました。カーシャは愛する家族や友だちに囲まれて、おだやかに暮らしていました。

ある日、カーシャが近くの森で花をつんでいると、とつぜん、ヴァヴェルというおそろしい竜があらわれました。大きなつばさを持ち、目がほのおのように燃えています。ヴァヴェルはカーシャにむかっていいました。

「いいえものが来たぞ。小むすめよ、おまえはおれさまのものだ！」

ヴァヴェルはかぎづめでがっちりとカーシャをつかみ、村の上を飛んでいってしまいました。

村には絶望が広がりました。人びとはヴァヴェルがいかに残酷かをよく知っていました。ヴァヴェルはたびたび村人をさらっては塔に閉じこめ、ひどいめにあわせていたのです。

これまでだれひとりとしてヴァヴェルに立ちむかう勇気のある者はいませんでした。けれども、とうとうヤンというゆうかんな若者が、ヴァヴェルを退治しようと名のりでました。カーシャに恋をしていたヤンは、愛しいカーシャを救うため、ヴァヴェルと対決することにしたのです。

ヤンはまず、年老いた魔女に相談しました。魔女は、竜をたおしカーシャを自由の身にする方法はただひとつ、魔法の銀のくつを見つけることだといいました。

「そのくつは、どうやったら見つかりますか。いったいどこにあるのでしょう」ヤンはせきこんでたずねました。

魔女はにやりとしました。

「銀のくつは魔法の森にある。だが、かんたんには見つからない。ヤンよ、おまえは試されている。純粋でゆうかんな心の持ち主だけが銀のくつを見つけることができるのだ」

魔女の言葉を胸に、ヤンは魔法の森に入っていきました。なぞめいた森は心ひかれる場所でしたが、危険でもありました。ヤンはいくつもの障害を乗りこえなければなりません

でした。小びとや小鬼、森の精など、魔法の世界の生きものがつぎつぎにあらわれて、ヤンの行く手をはばみます。けれども、そのたびにヤンはかかんに立ちむかったので、ヤンのゆるぎない心にうたれて、森の精が協力を申し出ました。

「ヤン、きみはゆうかんだ。カーシャへの愛は星のように光りかがやいている。ぼくたちがくつのある場所まで案内しよう」

何日か歩き続けて、ヤンはついに銀のくつを守っている魔法の木を見つけました。そこですぐさま木に話しかけました。

「ぼくはヤンといいます。カーシャを救うため、銀のくつを探しにここまで来ました。どうかくつをぼくにください」

木の声が、低くひびきわたりました。

「ヤンよ、そなたのまなざしには勇気が、心には善良さが宿っている。わたしがあたえる試練を乗りこえることができれば、銀のくつを持ちかえることができるであろう」

ヤンは受けてたちました。巣から落ちたスズメを助け、おばあさんが流れのはげしい川をわたるのを手伝い、まばゆい財宝を持ちかえりたくなる誘惑にたえました。試練をひとつ乗りこえるごとに、魔法の木はヤンをたたえ、銀のくつのありかをつきとめる手がかりをあたえました。

数々の試練を乗りこえ、ヤンはとうとう魔法の森の中心までやってきました。金色の光の輪のなかに、きらきらと光りかがやく銀のくつがありました。見たこともないほど美し

いそのくつには、魔法の呪文がきざまれていました。

銀のくつを手に入れたヤンは、竜のヴァヴェルと対決するために塔のところに行きました。ヤンがくつを地面に置くと、そこからとつぜん強い光が放たれ、ヴァヴェルに巻きつきました。すると、ヴァヴェルの力はみるみる弱まり、とうとうたおれてしまいました。とたんに塔がぐらぐらゆれてとびらが開いたので、ヤンは中に飛びこみカーシャを救いだしました。カーシャは感激してヤンの首にだきつきました。

ヤンもカーシャをだきしめ、ささやきました。

「きみがいたからできたんだよ、カーシャ。きみはぼくの光だ。きみのためならなんでもするよ」

ヤンはカーシャをつれて村へもどり、英雄としてたたえられました。ヤンの愛と勇気は伝説になりました。

バルセロスの雄鶏（おんどり）

訳——平野麻紗 (Asa Hirano)
絵——祖敷大輔 (Daisuke Soshiki)

むかしむかし、ポルトガル北部のバルセロスという静かな町に、外国からミゲルという旅人がやってきました。ミゲルは心やさしいひかえめな男で、サンティアゴ・デ・コンポステーラへの巡礼（じゅんれい）の旅の途中（とちゅう）でした。おだやかな顔にはやさしいほほえみがうかんでいました。

ある日、ミゲルがバルセロスの通りを歩いていると、地元の男たちの一団（いちだん）が近づいてきました。腹（はら）をたてているようすで、なにやら口々にさけんでいます。男たちはミゲルを見ると、この町の人間ではないことに気づき、意味ありげにたがいを見合いました。そして、

ひそひそと耳うちしあったあげく、ミゲルを重大な事件の犯人としてうったえることにしました。ミゲルは身に覚えがありません。男たちがどうしてそんなことをするのかもわかりません。何も悪いことなどしていないのに、いったいなんの罪でうったえるというのでしょうか。ミゲルはとまどいながらもどうにか気持ちをおちつかせ、勇気をふりしぼって説明しました。自分は無実で何も悪いことはしていないし、犯行が起きたときにその場にいなかった、と主張しました。けれども何をいってもむだで、その言葉は聞きいれられませんでした。こうしてミゲルは、犯人のぬれぎぬを着せられてしまいました。

疑わしい人物が見つかったというわさは、またたくまに町じゅうに広まりました。やがて、地元の裁判官で、すぐれた人物としてうやまわれているドン・ジョアンの耳にも届きました。

この一件に取り組むため、ドン・ジョアンは広場に人びとを集めました。公の場で、証人、告発者、そしてミゲルの話を聞こうというのです。広場には、外国からやってきた巡礼者を一目見て、そのいい分を聞こうとする人びとがつめかけました。

ミゲルは、りっぱな木のいすに腰をおろしたドン・ジョアンの前に連れていかれました。

「巡礼者よ、おまえは重大な罪をおかしたとうったえられている。いったいどう申し開きをするのかね?」ドン・ジョアンは重々しくたずねました。

ミゲルはおちついた声で、きっぱりと答えました。

「わたしは無実です、裁判官どの。信仰と平和を求めるただの巡礼者です。けっして罪

などおかしておりません」

ミゲルの言葉にうそはないように思われましたが、人びとのいかりはおさまりません。

「罪をつぐなえ！」だれかがさけびました。

ドン・ジョアンはミゲルの目をじっと見て、真実をさぐろうとしました。一瞬人びとが静まりかえったちょうどそのとき、耳なれない音が沈黙をやぶりました。美しく力強い調べがどこからともなく聞こえてきて、広場を満たし、人びとの注意をひきつけました。

ふいにドン・ジョアンの机の上にりっぱな雄鶏がおりたちました。人びとはあっけにとられて見つめました。雄鶏は羽がつやつやと赤くかがやき、ほこり高く堂々としています。その鳴き声は何かをうったえかけているようでした。ふしぎな調べが、聞く者すべての心にしみわたっていきました。

ドン・ジョアンは、とつぜんあらわれた雄鶏のすがたとすばらしい鳴き声におどろき、立ちあがりました。しげしげとミゲルを見つめると、こういいました。

「裁判を中断し、この雄鶏の歌がうったえるようにおまえに申し開きの機会をあたえよう。ミゲルよ、無実を証明してみせたまえ」

希望の光が見えて、ミゲルはドン・ジョアンの恩情に感謝しました。ひざまずき、地面に両手をついて、無実を証明することをちかいました。

その日から、ミゲルは自らの名誉を取りもどすためにしょうこを探しはじめました。そして、犯行が起きたときにミゲルが別の場所にいたことを証明できる人びとを見つけだ

しました。ミゲルはドン・ジョアンにしょうこを示しました。ドン・ジョアンは、真実を明らかにしようとするミゲルの意志の強さに心を動かされ、しょうこを念入りに調べたうえで無罪の判決をくだしました。

ミゲルが無罪放免になったという知らせはたちまちバルセロスの町に広まりました。人びとは、しょうこを集めて無実を立証したミゲルの強さと勇気をたたえました。

のちに巡礼者ミゲルを救った雄鶏は、バルセロスのすべての人びとにとって、自分たちを守り幸運をもたらすシンボルになりました。

大工と悪魔

訳——平野麻紗 (Asa Hirano)
絵——牧野千穂 (Chiho Makino)

むかし、チェコの静かな村に、ヤンという大工がいました。ヤンは、大工の腕まえは確かでしたが、なまけ者としても知られていて、すばらしい才能があるのに、のらくらしてばかりです。

ある日、ヤンが木かげで休んでいると、あやしげな男があらわれました。長いコートを着て、顔はかげになっていてよく見えません。それは、ほかでもない、悪魔でした。悪魔はにやにやしながらヤンに近づき、話しかけました。

「大工よ、わたしと契約をしないかね。おまえのかわりに仕事をしてやるから、たましい

をよこせ」

ヤンは、しめしめ、これで何もしないで気ままにくらせると思い、よく考えもせずに承知しました。

「よし、きまりだ！」ヤンはそういったものの、にやりとしてつけくわえました。「ただし、覚えておけよ、仕事の手を休めたら、こっちがおまえのたましいをもらうからな」

つぎの日、悪魔が前かけをして仕事をしているあいだ、ヤンはゆりいすに座ってくつろいでいました。でも、どうしても気になって、悪魔のようすをちらちら見ずにはいられません。

悪魔の仕事ぶりはたいしたものでした。みごとな手つきで材木を切って組み立て、はやいうえに正確です。けずりくずが宙を舞い、おどるようにあざやかに、おのや金づちをあつかいます。まるで見せ物を見ているようでした。

ヤンは、働いている悪魔におずおずと近づいてたずねました。

「なあ、どうやったらそんなにうまくできるんだい？　これほど腕のいい大工は見たことがないよ」

「そりゃそうさ、何百年も腕をみがいてきたんだから！　でも、おまえのたましいがもらえるなら苦労したかいがある」悪魔はにやりと笑いました。

ある日、悪魔が仕事にうちこんでいると、ヤンはおいしいおかしを見せびらかしはじめました。

「このおかしを食べたことがあるかい？　ひとくちも食べられないなんて、気の毒にな」

悪魔はおかしを食べたくてたまらなくなりましたが、ここで手を休めてはヤンとの契約をやぶることになってしまうと思い、じっとがまんしました。けれども、誘惑には勝てません。

「大工よ、べつのとりひきをしないか」悪魔はぬけめのない口調でもちかけました。「もしそのおかしをひとつ食べさせてくれるなら、もうおまえのたましいをうばうのをやめてやろう」

ヤンはしばらく考えるふりをしてから、うなずきました。

「わかった。ひとくち食べたらここから立ち去り、二度とあらわれないと約束するならやろう」

悪魔はうなずくと目をかがやかせ、ヤンが手にもっていたおかしをひったくりました。ところが、おかしが悪魔のくちびるにふれたとたん、まばゆい光が部屋をつらぬき、悪魔はけむりとなって消えてしまいました。

ヤンは勝ちほこって笑いました。まんまと悪魔をだしぬき、自分のたましいを救ったのです。ふたたび自由の身になり、これで、とくいな大工の仕事にもどることができます。

その日から、ヤンは仕事に打ちこみました。もうなまけ者ではありません。やる気がみなぎっています。ヤンのつくる家具は、その美しさと質の高さで村じゅうに知れわたりました。

ヤンのすぐれた腕前は王さまも知るところとなり、王さまは玉座をつくってもらおうと使者をつかわしました。

ヤンは王さまから選ばれたことをほこりに思い、すぐに仕事にとりかかりました。自分のもてる力をすべて注いで、これまでだれも見たことがないようなすばらしい玉座をつくりました。こみいった彫刻をほどこした、金色に光りかがやく玉座です。

完成してひきわたすと、王さまはその美しさとみごとなできばえに感激しました。ヤンをおかかえの家具職人に任命し、ほうびをたっぷりとあたえました。

こうしてヤンは、国いちばんの大工として国じゅうで有名になりました。けれども、目的を達成するには努力こそ大切なのだという、悪魔との出会いから得た教訓は、一生忘れることがありませんでした。

ハラプ・アルブ

訳——平野麻紗 (Asa Hirano)
絵——浦上和久 (Kazuhisa Uragami)

むかし、三人のむすこを持つ王さまがいました。むすこの名前は、カタリン、フルモース、ハラプ・アルブといいました。むすこたちが年ごろになると、王さまは今こそ身をかためるべきときがきたと考え、むすこたちを呼びました。

「むすこたちよ、おまえたちはそれぞれ世に出て、妻を見つけるときがきた。見つけられなければ、けっしてここへもどってきてはならぬ」

三人の若い王子は、未来の妻をさがしに出発しました。いちばん上のむすこカタリンは、

うぬぼれ屋で見えっぱりでした。二番目のむすこフルモースは、美男子でしたがいばり屋でした。どちらも形ばかりで、ほとんど旅の準備をしませんでした。

いちばん若いハラプ・アルブは、ひかえめでやさしく、自分よりも人の幸せを先に考える若者でした。王さまに忠告されたとおり、出発前に入念に準備をして出かけました。森をぬけるあいだに出会った貧しいおじいさんに、ハラプ・アルブは持ってきた食べものを分け、食事をごちそうしました。おじいさんはお礼に、使命をはたすには正式な持ち主に指輪を返すことがかんじんだと教えてくれました。

ハラプ・アルブはおじいさんの忠告を肝にめいじて、旅を続けました。やがて妖精の王の城に着きました。王はハラプ・アルブに、あるなぞを解くようにいいました。指輪をどこにかくしたかというなぞです。ハラプ・アルブは、指輪は鳥のくちばしのなかにかくされていたと正しくいいあてました。すると妖精の王は、その指輪をよこしまなオオカミジカにぬすまれてしまったと告げ、もしとりもどしてくれたなら、むすめのおひめさまとけっこんさせると約束しました。

ハラプ・アルブは数々の試練や困難を乗りこえてオオカミジカを見つけ、みごとにしとめて、指輪をとりもどしました。妖精の王の城にもどったところ、大喜びでおひめさまにむかえられ、けっこん式が盛大にとりおこなわれました。

けっこん式のあと、ハラプ・アルブは旅を続け、七ひきの子ブタを連れた母ブタに出会いました。子ブタたちから、キツネに殺されそうだから助けてほしいとたのまれました。

ハラプ・アルブは持ち前の能力と勇気を発揮してキツネをたおし、子ブタたちを救いました。お礼に魔法の馬をおくられ、はやく移動できるようになりました。

魔法の馬に乗って、ハラプ・アルブは旅を続けました。すると今度は銀のハトに出会い、魔女に殺されそうだから助けてほしいとたのまれました。そこでハラプ・アルブは魔女をたおし、ハトを救いました。ハトもお礼に魔法の馬をおくってくれました。二頭目の馬は、一頭目よりさらに速く走りました。

ハラプ・アルブは旅を続け、大きな川にたどりつきました。川にはどこにも橋がかかっていません。けれども、ハラプ・アルブのやさしさとこれまでのおこないを知って、川のおとめが救いの手を差しのべました。ハラプ・アルブが川をわたれるように、長い三つ編みで橋をかけてくれたのです。

こうしてハラプ・アルブはようやくふるさとの国に帰りつきました。王さまは、ハラプ・アルブがすべての使命をみごとにはたしてもどってきたのを見て、王位をつがせることにしました。ハラプ・アルブは公平でかしこい王さまとなり、妖精のおひめさまとともに幸せに暮らしました。

氷のおひめさま

訳―平野麻紗 (Asa Hirano)
絵―網中いづる (Izuru Aminaka)

スウェーデンの北のはてに、けわしい山と冷たい湖に囲まれた、魔法の生きものが住む美しい国がありました。国の真ん中に、三つの塔がある氷の針でできたりっぱな宮殿が建っていて、エイラという美しいおひめさまが住んでいました。エイラは氷のおひめさまとして知られていました。

エイラのはだは雪のように白く、顔をくっきりときわだたせる長い金髪は、ゆれると光の滝のようでした。青い目は冬のおだやかな空を映し、氷のようにきらきらとかがやいていました。

ある日、エイラが森のおくをひとりで歩いていると、心地よい調べが聞こえてきました。心をひかれて音をたどっていくと、魔法の気配がただようこおった湖の前に出て、湖の中からぼんやりとした人影があらわれました。

それは氷の妖精の女王でした。そのすがたはたいそう美しく、半分すきとおった羽が日ざしを受けてかがやいています。女王はしずしずとエイラに近づき、やさしい声でいいました。

「エイラひめよ、あなたがやさしくて純粋な心の持ち主だということは聞いています。そんなあなたにたのみたいとてもだいじな仕事があるのです。このこおった湖のおく深くに〈オーロラの石〉があります。この国を冬のねむりから目覚めさせることのできる魔法の石です。その石を取ってきてほしいのです。それができるのは、清らかな心をもったあなただけです」

エイラは、持ちまえの勇気をふるって、氷の妖精の女王のたのみをひきうけました。すると、羽がはばたく音とともに女王のすがたは消え、湖のほとりにはエイラひとり、とり残されました。

自分の力を信じて、エイラは女王のたのみをやりとげるかくごを決め、ころばないように用心しながら、こおった湖をわたりはじめました。

最初にたちはだかった試練は、ふしぎな魅力をたたえた氷の迷路でした。かべがダイヤモンドのようにかがやいていましたが、それはただの見せかけで、木々のあいだからさし

こむ日ざしが反射（はんしゃ）しているだけでした。美しさにまどわされてまよわないようにしながら、入り組んだ通路のなかから正しい道を見つけなければなりません。かべはたえず変化して、方向感覚をくるわせました。けれどもエイラはがまん強く、直感をたよりに迷路を通りぬけ、少しずつ〈オーロラの石〉に近づいていきました。

二つ目にたちはだかった試練は、こおった湖をふきぬける、氷のように冷たい風でした。風はあらゆる方向からふいてきて、エイラを前に追いやったり後ろにひきもどしたりしました。エイラはその冷たさにふるえあがりましたが、くじけることはありませんでした。マントで身を包み、かかんに風に向かって進んでいきました。そして〈オーロラの石〉を手に入れてみせるというかたい決意のもとに、とうとうこの試練を乗りこえました。

三つ目に待ちうけていた試練は、巨大（きょだい）な氷の生きものでした。この生きものは、〈オーロラの石〉を取られないよう見はるためにここにいました。エイラをこわがらせようと冷たい目でにらみつけながら、ゆっくりとした足どりで近づいてきました。

エイラはそれでもおじけづくことはありませんでした。目をそらすことなく、同情（どうじょう）をこめてその生きものと向きあい、やさしい言葉をかけ、おだやかにほほえんで心を通わせようとしました。争いたくはない、〈オーロラの石〉を手に入れたいのはただ氷の国のためなのだということを伝えようとしたのです。

エイラは話すうちに、巨大（きょだい）な生きものの氷の心がゆれていることに気づきました。石を守るためにうみだされたこの生きものは、エイラのけだかい目的を理解し、少しずつ態度（たいど）

をやわらげました。そして、〈オーロラの石〉のありかを教えてくれました。

エイラが最後に立ちむかった四つ目の試練は、〈オーロラの石〉を包む魔法の氷の層でした。強い冷気の層が宝石を包み、だれもふれることのできない膜をつくっています。そのまま石にさわろうとすると、たちまち手がこおりついてしまいそうです。

どうしたらよいかと考え、エイラはある方法を思いつきました。絹のマントで石をくるみ、その上からぎゅっとにぎりしめるのです。エイラの清らかな心のあたたかさがしだいに氷を溶かし、けがをすることなく石を手にとることができました。そして、エイラが石にふれた瞬間、こおった湖が命を宿したようにふるえはじめ、水がぬるみ、氷の国が春の楽園に変わりました。

氷の妖精の女王がエイラの前にあらわれ、国のためにつくした勇気ある行動をたたえました。感謝をこめて、エイラに氷でできた光りかがやくドレスを着せ、きらめく宝石で飾り、氷のおひめさまにふさわしいすがたに変えました。

それからというもの、エイラひめは深い思いやりをもって国をおさめ、人びとと自然界とのあいだに広く喜びと調和をもたらしました。

おわりに

日本を知るためのヨーロッパのおとぎ話、著者による日本文化へのオマージュ

マリーナ・ダマート
訳——上野真弓 (Mayumi Ueno)

千年以上にわたって独自の神話と価値観と行動規範を持つ日本文化は、一九七〇年代以降、世界中のファンタジーの世界で中心的役割を果たし、今では世界的共有財産となりました。

実際、史上初めてテレビやインターネット、ビデオゲームやソーシャルメディアが普及した地球上のあらゆる場所で、ファンタジーの世界は日本のキャラクターであふれています。

これは途方もなく大きな現象です。というのも、地球上で同一のファンタジーの世界を持つことは、人種や宗教や文化、イデオロギーの異なるすべての子どもたちに同じヒーローを認識させ、共有させ、同じ冒険に熱中させることを意味するからです。キャラクターが子どもたちにどのような形でどれだけ影響を与えるかは誰にもわかりませんが、集団で空想の世界を共有することはグローバル化の過程において基本要素であることは認めなければなりません。なぜなら、想像力は各々の世界の見方に刻まれるからです。

現に、アニメやテレビシリーズ、映画、ソーシャルメディアに出てくるキャラクターは、彼らが所属する社会の文化に基づいた考えを示し、行動し、他者と関係します。その証拠に、たとえば北米で誕生したファンタジーはキリスト教プロテスタント的価値観を持つ世界が原点であり、いっぽう

日本の場合は神道や仏教、儒教の信仰が根づいています。キャラクターは、彼らが生まれた世界の価値観と行動規範の表現であり、代々受け継がれていく新たな神話を構築していると言えます。けれども決してその土地の伝統的なおとぎ話の世界と重なることはありません。実際、おとぎ話は精神的な冒険と捉えられ、子どもを自身のアイデンティティや才能の発見へと導き続け、さらに自身の個性を発展させて目標に到達するにはどのような経験が必要かのヒントをくれます。たとえ日常生活の中で逆境にあったとしても、誰もが前向きで満足できるような人生を持ち得るということ、そして困難を乗り越えながら人は成長して生きていくということを教えてくれます。おとぎ話はこのような深い意味を持っているのです。

この前提に基づくと、この本には二つの目的があることになります。根本となる一つ目は日本の子どもたちにヨーロッパ各国のおとぎ話を知る機会を贈ること、二つ目はヨーロッパと日本という二つのおとぎ話の世界を近づけたいということです。

私がこのテキストで伝えたいことは、二つの文化間にあるヒーローや行動規範が異なっていても、普遍的価値観はまったく同じだと明らかにすることです。

神話に由来する伝説は、物語や小話、説話やおとぎ話に姿を変えてきました。これらは地球上に人間が暮らしを営むようになって以来存在するもので、人類学者は、おとぎ話はどの時代においても親しみやすく、個人が他者と生き、自身の経験した恐れや喜びを分かち合うという必要不可欠な欲求に呼応し、行動規範を整えて次の世代に社会道徳の基準を伝えていくものだと明言します。しかしながら、日本ではヒーローや神話に関してまったく独自の特性があります。何千年ものあいだ、地理的にも政治的にも宗教的にも他の民族にほとんど侵略されなかったため、計り知れないほど大きな宝を守ることができたのです。日本のおとぎ話は、自然と神のつながりを持つ神道、無常と慈悲の教えを持つ仏教、尊敬と義務を大切にする儒教などを原点とする複雑な精神性を反映する価値観を表現し、伝承しています。このようにして特別で魅力的な整然とした比類なき世界を築いたのです。その中で

おとぎ話の形態が発展していき、民話の中でさえも他者を尊重し、親切にすること、そして感謝の気持ちを持つことを実践するように示しているのです。

西洋にとって例外とも言える圧倒的斬新さは、日の出る国の神話と価値観を、異文化を受容する大人にとって親しみやすい文学や演劇、映画という形式ではなく、異なる形態のアニメやビデオゲームを通して知り、触れることでした。

日本のおとぎ話は、自然をうやまい自然界との調和を尊重する物語を明確に提示することで世界を席巻しました。自然は聖なるもので、木々や山々、川など、この世に存在するもののすべてに魂、つまり神が宿るという考え方です。この自然崇拝は日本の美学、季節の称揚や祝祭に影響し、自然と共存する和という価値観だけでなく、争いを避け、調和のとれた人間関係を維持することを伝えています。ゆえに、尊敬と礼儀は、特に目上の人に向けられますが、他者との会話や電話での応対においても敬語の使用に表れるのです。この価値観は階級制や家族を重要視する儒教に起源があります。感謝の気持ちもまた、アニメの中で食事の前後に「いただきます」「ごちそうさま」と手を合わせるように、さまざまな形で表現されます。日々の生活と食事ができることを先祖と神々に感謝する宗教と、他者に対する感謝の気持ちが基本的な社会原則となっている文化に結びついているのです。忍耐力と自己鍛錬、つまり愚痴を言わずに困難に耐えるという能力は、幼年期から教えられる大切な価値観で、労働や勉学や日常生活の中の規律に反映し、継続的な向上心につながっています。この価値観がどれだけ大切であるかは、アニメにおいても困難な立場におかれた主人公が冷静に多大な忍耐力で乗り越えるストーリーで明確に示されています。集団意識と共同体への帰属意識はもう一つの特徴で、個人主義より集団の調和を優先する日本のヒーローの独自性を理解するのに役立ちます。和、つまり調和は、集団のまとまりを維持するために協力と理解をうながす価値観です。集団意識や共同体への帰属意識は、協力すること、他者に迷惑をかけないこと、利己的な行動を避けることの大切さを強調します。テレビアニメでは先祖を尊ぶ気持ちと過去とのつながりが深く浮かび上がっています。

先祖をうやまうことは、神道や仏教から影響を受けた非常に重要な精神的価値観です。お盆は先祖の霊が現世に戻り家族を訪問すると信じられている祝祭ですが、このような行事で先祖は思い出されて称えられるのです。しかし、テレビで放映されるアニメシリーズでは、家族や過去とのつながりが個人や集団のアイデンティティにおいても基本となるという考えが強調されています。もう一つの特殊なテーマは、純粋さとシンプルさという価値観の追求です。これらは心身の純粋さを称える神道と日本の美学に不可欠なもので、テレビのヒーローの世界では無常の受容という概念も加わります。これは仏教における存在の概念で、物語の主人公の考えや言葉や行動に反映されています。すべては変わっていく運命にあり、永続するものなど何もない。この認識は、今この瞬間を生きること、人生のつかの間の美しさを享受することをうながします。これは、名誉や他者への思いやり、相互の義務づけと共に、隣人に対する道徳的責任を定義する価値観であり、人間関係を深める敬意と義務の社会的ネットワークを築くのに役立ちます。心の平和と継続的な向上心の探究は、平穏と幸福を維持するために最も重要なことで、日常生活で多くの人が実践する哲学です。個人の能力あるいは自己の精神力によって、常に成長して向上を続けることをめざします。

これらの精神的価値観は社会生活や文化の中にしっかりと組み込まれており、日常生活の習慣や選択に影響を与えています。おとぎ話はそれを表現して広め、西洋でもこれらの物語の調和のとれた美学をとりこむだけでなく、より深い精神性を吸収する傾向が強まっています。

私たちは、桃太郎が人々を守るため悪との困難な戦いに向かう時に動物たちを仲間に加えたことから、人間と自然の調和のとれた関係を学びました。浦島太郎は私たちを神々と神秘的世界の領域に近づけてくれましたが、あわせて人生のはかなさや永続するものは何もないことも教えてくれました。『鶴の恩返し』では、動物が心を持っていることがわかりました。それゆえ、人間に感謝したり助けたりするために内在する力を発揮して人間の姿に変わったのです。また、自己犠牲と約束を守ることは、物質的欲望から離れることだとも知りました。

西洋が日本の伝統的なおとぎ話を知ることができたのは、漫画やアニメにも起因します。これらはしばしば、古い民話のテーマや登場人物、価値観を再解釈し、西洋も含めた現代の観衆のニーズや好みに合わせています。提示方法はさまざまで、直接的に物語を引用する場合もあれば、感謝の気持ちや忍耐力、調和、自然への尊敬など、伝統的な物語に内在する普遍的なテーマや価値観を再提案することもあります。アニメの世界に登場するキャラクターは、おとぎ話の主人公やそこで繰り広げられる冒険に着想を得て、しばしば主人公の旅という形で再構築され、そこで主人公は冒険の旅を始め、多大な困難を乗り越えて成長した姿で勝者として帰ってくるのです。西洋のおとぎ話でも旅から始まるのは同じですが、日本の場合はより精神性が高く象徴性が強く、たとえば『NARUTO　ナルト』では、犠牲的精神と忍耐力で向上するという仏教の概念を思わせる内的な精神的課題を主人公が乗り越えていく成長過程が描かれています。日本のおとぎ話に登場する架空の生き物や霊は、『BLEACH　ブリーチ』や『鬼滅の刃』などからわかるように、多くの漫画やアニメに欠かせない要素です。作品の中では悪霊や鬼が物理的世界と精神世界のつながりを象徴しながら人間世界と対決しています。また、浦島太郎は、おとぎ話の要素を新たな世界と新しいキャラクターで再解釈した『ONE-PIECE　ワンピース』や『フェアリーテイル』の中に、他の伝統的ヒーローと共に登場しています。

日本の伝統的なヒーロー、桃太郎、武士、さらに天照大御神などの神々は、たびたび現代風にアレンジされ、文学、漫画、アニメ、ビデオゲーム、映画など、さまざまな文脈の中で再解釈されてきました。これらのヒーローはどのように読み直されたのでしょうか。漫画とアニメは伝統的ヒーロー像を再提案するのに強力な伝達手段となりました。桃から生まれた少年が鬼を退治する桃太郎はさまざまな形で現代風の漫画にアレンジされています。同じように、侍や将軍の物語が『るろうに剣心』のような作品の中で、正義と名誉の価値観が復讐と贖罪のテーマと混ざり合い、現代の抱える問題とよりいっそう合致して表現されています。ビデオゲームでは伝統的ヒーローがしばしば未来や

架空の世界を背景に登場します。たとえば、有名な『鬼武者』は侍の伝統と超自然的現象を組み合わせたゲームです。ここでは歴史上の戦士たちが架空の怪物や闇の勢力と戦わなければならず、歴史とファンタジーの架け橋を築いています。映画も同様です。映画の中で多くの神話上の人物が宮崎駿監督の『もののけ姫』のような作品の中で再解釈されてきました。ここでは自然とテクノロジーの闘いという伝統的なテーマをよみがえらせ、よりよい社会を築くために伝説のヒーローのように闘う主人公をつくり出しています。さらにファッションやポップカルチャーさえも伝統的なヒーローや人物像を復活させました。侍や芸者はポップカルチャーの中で現代風にアレンジされ、戦士の甲冑や刀のような要素はファッションやスタイルの文脈でも伝統と現代の美学を混ぜ合わせて再解釈されたほどです。いくつかのケースでは、これらの人物像は強さや忠誠心、名誉や洗練、調和のシンボルとして広告やブランド構築のキャンペーンでも使用されました。文学においても例は事欠きません。なぜなら、吉川英治の『宮本武蔵』のような現代小説の中でも侍像は現代の人物像へと進化し、伝統と変化の衝突という現代の倫理的課題を映し出し、道徳的ジレンマを探っているからです。

これらの例は、伝統的モデルを持つおとぎ話の世界がいかに現代のテーマ、不安や価値観に呼応し適応されているかを示すもので、神話や伝説をダイナミックに存続させながら、とりわけ日本の思考方法の枠組みを知らしめる力を持っていることを教えてくれます。

ポケモンの急速な普及は特別な考察に値します。世界中で人気を博したのにはいくつかの理由があって、それぞれが長期的な成功と人気に貢献しました。これは画期的なゲームです。最初のポケモンゲーム（一九九六年発売）が先駆となり、小さな子どもから大人まで幅広い層のユーザーを惹きつける普遍的な魅力を持つポケモン（キャラクター）が企画されました。登場する生き物たちは、現実と空想、過去と現在を混ぜ合わせながら、実際の動物や神話上の生きものから着想されたもので、好感と興味と多様性がバランスよく配分されています。マルチメディアの拡大がポケモンの成功の基盤で、トレーディングカード、アニメ、映画、おもちゃなどの商品化がすばやく展開されました。さまざまなメ

ディア（テレビアニメ、カード、おもちゃ）が絡み合い、互いに支え合うマルチメディアのとりくみは、集団心理の中で常にポケモンが存在し続ける効果を与え、時が流れると郷愁と文化的愛着という感情を作りあげました。多くのファンは一九九〇年代にポケモンと共に育ち、大人になっても懐かしさと幼年期の思い出につき動かされてポケモンを追い続けています。ポケモンの物語、とりわけサトシの冒険を描いたアニメは時代を超えた魅力を持っています。粘り強さや友情、成長などのテーマを中心に置き、あらゆる年齢層に訴えるものとなったからです。

おとぎ話と現代風にアレンジされた物語の成功は、登場人物の多様性、物悲しさの中にある美意識、善と悪、生と死のあいだのバランスを絶え間なく追求していく中に見出されます。これらは永遠のテーマであり、新しい形で表現される文化の中で常に更新されていくのです。

日本のファンタジーの世界に浸るのは、それが素晴らしい物語の隠れ家であるだけでなく、謎に包まれて引き込まれてしまう深遠な物語の中で、複雑な人生の移ろいや自然や人間存在を探り、理解し、立ち向かっていくための手段でもあるからです。

おとぎ話にこれ以上の何を求めることができるでしょうか？　もしかしたら、私たちは、日本文化のアイデンティティに感情的に近づき、宗教と精神性の関係を把握し、道徳的な価値観を突き止めることができるでしょうか？　社会をよくするために勇気を持って苦難を乗り越えるヒーローたちに会うことができるでしょうか？

いずれにしても大いなる感謝の気持ちを送ります。天照大御神と再生と光の回帰を扱うすべての物語に。救世主の概念を体現する桃太郎に。時間旅行に誘い、現実の世界と海の底の神秘の世界を見せてくれる浦島太郎に。多くのおとぎ話で教訓の象徴や直面する困難の擬人像として登場する「天狗」に。別離やアイデンティティ、運命について考えさせてくれるかぐや姫に。侍が持つ自己犠牲の精神、名誉の意識、その一徹さに。

ヨーロッパのおとぎ話

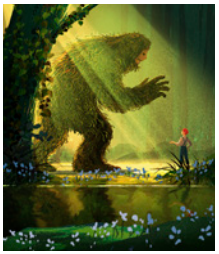
編　著	マリーナ・ダマート
本文翻訳	村岡直子、小机菜穂、平野麻紗
本文翻訳統括	宇野和美
編者序文＆ あとがき翻訳	上野真弓
挿絵（登場順）	ヒグチユウコ、浦上和久、牧野千穂、門田千明、 網中いづる、寺澤智恵子、祖敷大輔
本文デザイン・ 組版・装丁	永松大剛
校　正	渡辺美保
編　集	田中優子（みにさん・田中優子事務所）
発　行	駐日欧州連合代表部 〒106-0047　東京都港区南麻布 4-6-28 ヨーロッパハウス 電話　03-5422-6001
2025年4月	日本語版初版印刷
印刷製本	モリモト印刷

Printed in Japan

D.R. © European Union, 2025

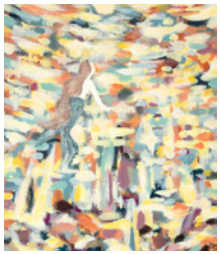
ISBN：978-92-9463-252-4
DOI：10.2871/6904929
カタログ番号：IR-01-25-000-JA-N

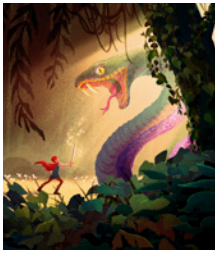
本書のコピー、スキャン、デジタル化などの無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業社などの第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、いかなる場合も著作権違反となります。

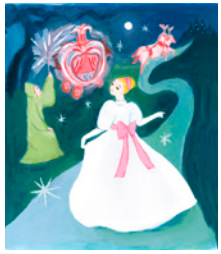


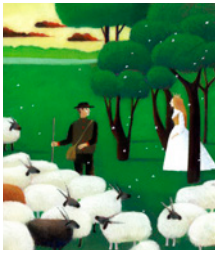
Marina D'Amato

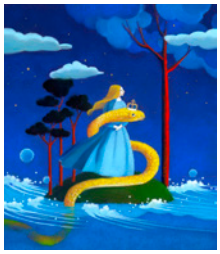
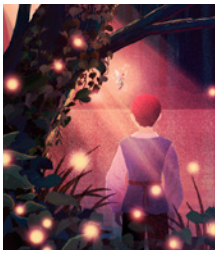
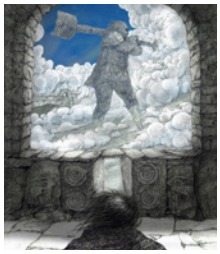
ÉRASE UNA VEZ EN EUROPA

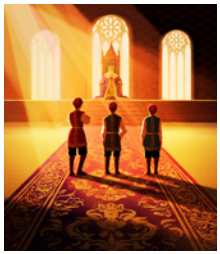










European Union

ISBN 978-92-9463-252-4

IR-01-25-000-JA-N